

國文新讀本 卷五

375.9  
Fu 10  
資料室

41547

教科書文庫

4
810
41-1923
20000 50943

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





東京帝國大學教授 文學博士 藤村 作  
東京帝國大學助教授 文學士 島津久基 共編

# 國文新讀本

## 東京 至文堂



### 國文新讀本 卷五

#### 目次

一	櫻と國民性	芳賀矢一	一
二	尊皇の精神	芳賀矢一	七
三	古城のほとり(韻文)	島崎藤村	二七
四	宿かりの死	志賀直哉	一九
五	廢滅の寺々	近松秋江	二七
六	西郷隆盛(一)	芥川龍之助	三七
七	西郷隆盛(二)		四八
八	七騎落(謠曲)(一)		五四

目次





九 七騎落(謠曲)(二)..... 六〇

一〇 眞人間 ..... 吉田絃二郎..... 六六

一一 笛吹と王との話..... 佐藤春夫..... 七三

一二 法隆寺の鐘..... 高濱虚子..... 七九

一三 乃木大將の殉死..... 徳富蘇峰..... 八四

一四 近世佳調 和歌)..... 九二

一五 武藏野の路..... 國木田獨歩..... 九七

一六 「鷹が渡る」..... 野村傳四..... 一〇四

一七 日二題 ..... 徳富蘆花..... 一一〇

(一) 大海の日の出 ..... 一二〇

(二) 相模灘の落日 ..... 一二三

一八 霧の野尻湖 ..... 吉江孤雁..... 一二七

一九 風致史蹟の保護..... 徳富蘇峯..... 一三八

二〇 千劔破城 ..... (太 平 記)..... 一三四

二一 羅馬のパンテオン(書牘)..... 赤木格堂..... 一四〇



卷五 目次 終

國文新讀本 卷五

文學博士 藤村 作  
文學士 島津久基 共編

一 櫻と國民性

日本語では、すべて物の端をハナといふ。人間の顔の最  
前端に在るものは鼻である。花も同じことで、植物の最も  
先に在るものである。すべて物の最も著しく目立つ部分  
がはなである。



古の人は櫻のことを「花ぐはしさくら」というた。「くはし」は微妙の義、即ち總べての花の中で最も微妙なる花といふ意である。もう一步進めて、「木の花」といつて櫻を意味し、「花」と歌うて櫻を指してゐる。これらを見ても、古代の日本人が、櫻を愛し貴み、櫻を以て花中の花とし、最上の花と見てゐたことが知られる。

天孫瓊々杵尊が我が國土に降つて娶られた、國つ神の女木花開耶姬は、其の容貌の美麗であつた爲に此の名を負はれたのであらう。否、この姫が櫻花美かの人格化であるかも知れない。萬葉集中にもすでに櫻を詠じた歌が多く見ゆるのである。

「さくら」といふ言葉の源を尋ねれば、花がさくの「さく」といふ言葉に原づくものである。「さきはへ」「さかえ」「皆さく」と同源の語である。それで「さくら」といふ言葉の中には、自然「幸福」「繁榮」等の意を含む。萬葉集中に「さくら」といふ語に「作樂」と漢字を充ててあるのは、「さくら」の語の中に含んだ「悅樂」の意を文字に示して面白い。

平安朝の和歌・物語・草子の中にも櫻に關して書かれたことは少くない。朝廷に於ては、早くより櫻花を鑑賞せられ、年々花の宴を催されて、群臣の歌詩を徵せられ、風流の遊をなさせられた。民間の花見といふものも蓋しこれから起つたものであらう。花見は古來國民の年中行事の一であ



る。櫻狩といふ名すでに美しい優しいものである。かくして櫻花と國民性とは離るべからざる關係を有つに至つてゐるのである。

櫻に關する美しい歴史上の物語も少くない。攝政良房の「花をし見れば物思ひもなし」の歌、伊勢大輔の「いにしへの奈良の都の八重櫻」の歌のことは誰知らぬものもない。大宮人の風雅もさることであるが、武人に關することは一層の趣を持つてゐる。義家の勿來關の歌、忠度の志賀の都の歌に關する故事は共に有名な物語である。後醍醐天皇の吉野行宮で詠ませられたこと、にても雲々の櫻咲きにけり、ただかりそめの宿と思ふに、御詠を始めとして、吉野朝武

いにしへの  
奈良の都の  
八重櫻今日  
九重に匂ひ  
ぬるかな

さざ波や志  
賀の都は荒  
れにしを昔  
ながらの山  
櫻かな

十五

士の櫻によつて感懷を詠じた歌の多いことは、吉野朝の歴史を一層意味深くしてゐる。吉野朝と忠義と櫻、この三つが自ら結び付いて、當時の歴史を思ふ我が國民の胸に沁み入る、一種痛切な感じがある。

櫻に對して、古人は往々狂熱的な感情を發露してゐる。

上東門院の仰せとあつて奈良の八重櫻を京都へ移し來るやうにと命ぜられた所が、奈良法師はその命に従はず、動もすれば亂暴の擧にも出でかねまじき形勢をなした。門院これを聞召されて、奈良法師はものわからぬものと思つてゐたが、此の風流を解するとは殊勝な事よと仰せられて、却つてこれをめでられたといふ。櫻町中納言は、花の壽を

藤原成範



延ばさうとして神に祈つたといふ。此の外、能因・西行等の歌にもこの種の熱情が表されてゐる。

櫻花に對する國民の趣味は、物の名や模様やに見ることが出来る。衣服に櫻襲があり、鎧に小櫻緘があり、食物に櫻餅がある。又衣服・漆器・武具等の模様にも頗る多い。

斯く我が國民は、太古より今日まで貴賤上下の區別なく櫻に對して愛著アイシヤクと尊敬とを有つて來てゐる。さうして、我が國民性とは密接不離の關係が有たるゝに至つた。その花の一時に揃つて咲くといふこと、満朶爛漫の美觀を一時に呈することは、極めて快活で、樂天的で、光明的で、積極的な我が國民性に甚だよく似てゐる。その一時に散つて何の

未練氣なきは、我が國民性の執著なく思ひ切りよく、武士となつては潔く屍を戰場に暴して恐れぬのに似てゐる。國民性の標象として、これほど遺憾なき國華が他にあらうか。櫻は我が國民に取りて、實に唯一無二の花である。

(芳賀矢一の文に據る)

## 二 尊皇の精神

我が國民が皇室に對して厚い忠誠の念を持つてゐることとは、上古以來少しも變らぬ。武家時代、大權の下に移つたのを見て、全く尊皇心が無くなつた時代と思ふのは皮相ヒヤウの見ミに過ぎぬ。外人などは往々さういふことを言ふ。これ



は自分等の國柄から考へるからである。權臣が寵恩に慣れて專横な政をしたり、將軍が兵馬の權を握つたりした事實は、國史の上では勿論面白くない現象に相違ない。併し其の間は頼三樹三郎が歌つたやうに「天邊大月缺光明」の時代で、言はば浮雲が天日を蔽うたのである。決して本來の日が無くなつたのではない、天下の人は皆天日の空にあることを知つて居つたのである。兵馬の權を掌握した公方様でも、やはり天皇の臣下で天皇から爵位を戴いて居ることを知つて居つた、天皇の御代理として國民の上に立つて居ると信じて居つたのである。天皇が政治からお離れになつても、天皇の御威光は少しも衰へては居らぬ、却つて益

神聖なものと見上げて、愈、神と同様に尊崇するやうになつた。公方様を見ても何とも思はぬが、九重雲深くまします禁裏様を拜めば目が潰れると信じて居つた。藤原氏の攝政關白時代でも同様で、幼冲の天子を擁立し奉りて攝關が政權を恣にしても、皇室の尊嚴なることは少しも變らぬ。攝關時代も、武家時代も、そこに何等の差別は無い。攝政や、關白や、將軍や、彼等自身も亦政權を握つては居るが、皇室を尊敬し奉るの念を失はず、朝廷の恩寵を笠に着て、下に號令したのである。西洋人は國史を見ても其の皮相を見るのみであるから、武家時代は國民が全く朝廷を忘れた時代かと早合點する。久しく日本に居て日本文學に通曉して居



るチャンブレン氏でさへ、やはりさう信じて居る。それで  
徳川以來起つて來た水戸の尊皇論、國學者の愛國論を以て、  
一旦廢れたものの復興のやうに考へ、今の教育は全くミカ  
ド崇拜を教へる爲に、爲政者が工夫したもののやうに論じ  
て居る。焉んぞ知らん、我が尊皇心は、攝關時代も、武家時代  
も、一貫して國民の間に磅礴して居つた事を。そは藤田東  
湖の正氣の歌に、

神州孰君臨 萬古仰天皇 皇風洽六合

明德侔太陽 不世無汚隆 正氣時放光

といつた通り、歴代時々あらはれて居る。民主的王國たる  
英國の國民には、どうしても日本の尊皇心は了解が出来か

ねるのである。

我が國文學を見れば常にこの精神が發揮せられて居る。  
見よ上代の祝詞は即ち祭祀の文學にして、即ちマツリゴト  
の詞である。柿本人麿の長歌は更に之を抒情歌に應用し  
て、奈良時代の雄大な長歌を成し得たもので、常に神代より  
説起し、山川より仕ふる大君と歌つたのである。和歌を基  
礎として起つた平安時代の物語、日記は、つまり朝廷のみや  
びを寫し、其の儀禮を記載したものである。紫式部にして  
も、清少納言にしても、低い身柄でありながら、身は月卿雲客  
と伍して至尊に近く侍つた名譽を筆述したのである。之  
を無上のほまれと思惟して宮中の見聞を記載したのであ

持統天皇の  
吉野宮に行  
幸の柿本  
の人の長歌  
の節に「山  
川もよりて  
仕ふる神の  
御代かも」



る。然るべき人の女などは禁中に宮仕されるがよいといひ、宮中の御模様を見ては常に有難涙のこぼれることを敘して居る。枕草子は全部が其の時代の懷舊談である。これ等の書物の讀者も亦之によつて宮中の模様を餘所ながら視ひ知ることを喜んで面白く讀んだのである。延喜時代に和歌の勅撰集が始まつて爾來、歌人は勅撰集に其の詠の入るのを無上の名譽と感じた。歌と朝廷とは茲に全然離るべからざるものとなつた。太古から存在して、形式も言語も純日本である所が、皇室と同じである。敷島の道と稱し、葦原の道の名のあつたのも是が爲である。近世の懷慨家に歌人が多く、歌人が常に尊皇家であつた理由も、これ

で理解せられる。平家物語などの軍記物語、そのの一轉して劇化せられた謠曲の類が常に神祇を尊び、皇室を崇めることはいふまでも無い。

概して厭世主義のはびこつたといふ鎌倉南北朝時代の文學にも尊皇の思想は絶えず繰返されて居る。

御門の御位はいとも畏し、竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんことなき。

衰へたる末の世とはいへどなほ九重の神さびたる有様こそ世づかずめでたきものなれ。

などといつてある。かく朝廷を崇める思想が即ち有識故實の學問の起つた所以である。「何事も古き世のみぞ慕は

徒然草中の  
語

徒然草の一  
節

徒然草の一  
節



しき」と云ふので、平安朝の典雅なみやびをしのぶ當時の時代精神を成し、随つて所謂擬古の文體までも起つたのである。擬古文は徳川時代の國學者が作り始めたのでなく、已に鎌倉時代に起つて居る。徳川時代の戯曲・小説は多く武士道を主として居るので、朝廷を歌はないが直接に朝廷をおとしたものは一つとして無い。況や徳川時代には國學者の歌文に於ても、漢學者の詩文に於ても、尊皇を歌つたものは、時代の切迫と共に益、多くなつて來た。之を要するに太古から今日まで、何時の世、如何なる文學を見ても、皇室に對して不平がましい言は半句として無い。國民が朝廷を忘れたやうに見える時代はあつても、決して忘れたのでは

無い、衷心からの尊敬心は毫も渝らなかつた。此の國土は即ち皇室と共に存在する。諸冊の兩尊國土を産ませられて、次に天照皇大神を生ませられたといふ上代思想は、嚴として遺つて居るのである。

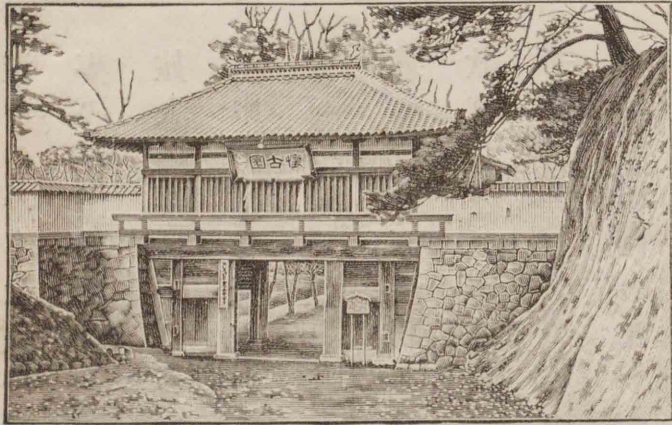
西洋では王室と國土との關係が密接で無い。外國の王族は二三百年の昔に遡れば地方の豪族位なのが多い。それ故祖國を護れといふ事を教へる。且大抵の國歌は、國民の自由を歌ひ、國家の繁榮を歌ふ事が主になつて居る。米國のはもとより、英吉利のルール、ブリタニヤでも、佛蘭西のマルセーユでも皆それである。よし國王を歌ふにしても、神よ國王に幸あれと、國王以外にゴツドを考へてゐる。我



が國の君が代は唯簡單に御代長久を祝してある、それが即ち國歌である。皇室の繁榮は即ち國家の繁榮である、而して又臣民の繁榮である。之を區別して歌ふ必要はない。諸外國は最初から皇室と國土とが離れて居る國風である。政體が幾變遷し、主權者が幾たび新たにならうとも、國家は依然として存續するであらう。之に反して我が日本は皇室と國土とは切つても切れぬやうに結付いて居る。皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であることを知ると同時に、皇室なくして日本國もなく、日本人も存在し得られぬといふことを深く念はねばならぬ。

(芳賀矢二)

### 三 古城のほとり



小 諸 城 址

小諸なる古城のほとり、  
 雲白く遊子悲しむ。  
 緑なす蘩蕪は萌えず、  
 若草も藉くによしなし、  
 しろがねの衾の岡邊、  
 日に溶けて淡雪流る。  
 あたゝかき光はあれど、  
 野に滿つる香も知らず。



淺くのみ春は霞みて、  
麥の色僅かに青し。  
旅人の群はいくつか  
畠中の道を急ぎぬ。

暮れ行けば淺間も見えず、  
歌哀し佐久の草笛。  
千曲川いざよふ波の  
岸近き宿にのぼりつ、  
濁酒濁れる飲みて、  
草枕しばし慰む。

信濃ノの地名

(島崎藤村)

#### 四 宿かりの死

大きな蠼螺の殻にはいつてゐる宿かりが、岩の上から下に澤山集まつてゐるきしやごを見おろして、

「小さいな。」と思つた。

「相變らず、うち／＼してゐやがる。」と腹で冷笑した。

彼は以前自分が其の殻の一つにはいつて仲間のやうにしてゐた事を憶ひ出して、自分ながらよくもこんなになくなつたものだと思つた。

宿かりは勢よくきしやごを押分けて、岩を駈け下りると、一度宙返りをしてどぶんと海の中へ飛込んだ。



わあ——といふきしやご共の笑ひはやす聲が聞えた。  
「馬鹿共が、」かう思つて、彼は大きな者のみを感じ得る寛大な心持を味はひながら海の底をのそくと歩き廻つてゐた。

彼は傍に何かごり／＼といふ音を聞いた。

見ると、それは自分よりも大きな蝶螺が、そろ／＼と岩を這上つて行く所だつた。

彼は急に堪らない恥づかしさを感じた。

彼は蝶螺に見つからないやうに拔足差足其處を退いた。一人になると、彼は急にむか／＼と腹が立つて來た。そしてすぐむりやりに自分の殻を脱いでしまつた。

砂地を今度はそろ／＼と臆病に這つて行つた。柔かい

尻が砂で擦れて痛くてやりきれなかつた。

彼は苦しんだ。一日一晚苦しんだ。そしてやりきれなくなつた時に、丁度其處に非常に大きな法螺貝の殻を見出した。それは昨日彼を脅かした蝶螺よりも、更に／＼大きかつた。

彼は靜かに尻の方から其の中にもぐり込んで、やつと安心した。

其の貝は重く、且彼の身體にはゆる／＼だつた。が、構はず苦しい想をして、それを曳きずつて歩いた。

彼は又大きくならう、大きくならうといふ慾望に燃え立



つた。

一年程経つた。

そして彼は驚くべき發育で、其の法螺貝の中に一杯の大ききまで育つた。もうそれを曳きずつて歩く事は何の苦もなくなつた。

彼は餘りいら／＼しなくなつた。前程には大きくならうといふ慾望も燃え立たなくなつた。

其の時彼は偶然又すてきに大きな法螺貝にてつくはした。

彼は吃驚した。殆ど氣絶しかけた。

彼は蝶螺の殻にはいつてゐた時、大きな蝶螺に逢つた時

よりも倍の倍も自分を恥づかしく感じた。

腹を立てるに於ては、もう力が足らなくなつた。

彼は全く自分に失望した。

自分がどれ程大きくなるにしても、其處には何時も自分だけの大きさの貝殻がなければならぬと思つた。彼は全く絶望してしまつた。

彼は直様自分のはいつてゐた法螺貝を捨ててしまつた。

彼は又殻なしで痛さを我慢してそろ／＼と大病人のやうに海底の砂地を這つて行つた。

時々其の傍を輕蔑するやうな横眼づかひをしながら伊勢鰈がびん／＼と勢よくはねて通つた。龍の落子がかけ



んな顔をして立留つて彼を見送つてゐた。

彼は愈やりきれなくなつて來た。

それでも未だ何かを求めるやうに、海の底を一方へ一方へ、ずる／＼と其の柔かい腹を曳きずつて歩いて行つた。

路々彼がはいれる位の大きな法螺貝の殻にも出逢つた。併し彼は今更それにもぐり込まうといふ氣はしなかつた。

彼は極端に憂鬱になつた。

力も萎えて來た。

彼はもう自分も死ななければならぬと思つた。

何故自分の生涯の結末がこんなにならなければならぬかつたらうと考へた。

それよりも何が只の宿かりでゐられない慾望を自分に與へたのだらう。

そしてそれは何の爲だらうと考へた。

彼がきしやごの殻にゐた頃の夢想は、遠の昔彼に來てしまつた。が、それは彼に何の幸福をも持ち來さなかつた。

彼は常に満たされずに來たのだ。

彼の精神も肉體も段々にまるつて來た。

とう／＼動けなくなつた。

そして死んだ。

其處に丁度近所の臨海試験所の船がやつて來た。



宿かりの死骸は偶然にも其の網にかゝつて引上げられた。

學者等はそれを見て驚いた。どうしてこんな大きな宿かりが出来たのだらうと驚き、且その手に入つた事を喜んで。

彼等はすぐ船を引返して、早速それを酒精漬にすると、世界中に恐らくこんな大きな宿かりはあるまいと話合つた。

彼等は獨逸の動物學會宛に其の報告書を書くことにした。

塚の外から宿かりの柔かい尻の擦りむけて、腸の出た所

を切りに眺めてゐた其の内に、博士が

「あんまり大きくなり過ぎて、もうはいる貝殻がなくなつて死んだに相違ない。」といつた。

宿かりの身體は酒精でそろ／＼色が變つて來た。

そして彼は未だ死んだ時の絶望と苦悶とを顔に表して眼を眠つたまゝである。

動物學者等も其の表情は固より、宿かりの心理に就いては何も知る事は出来なかつた。

(志賀直哉)

## 五 廢滅の寺々

河内の國の平野が、一望統の如き春霞に立罩められて、麥

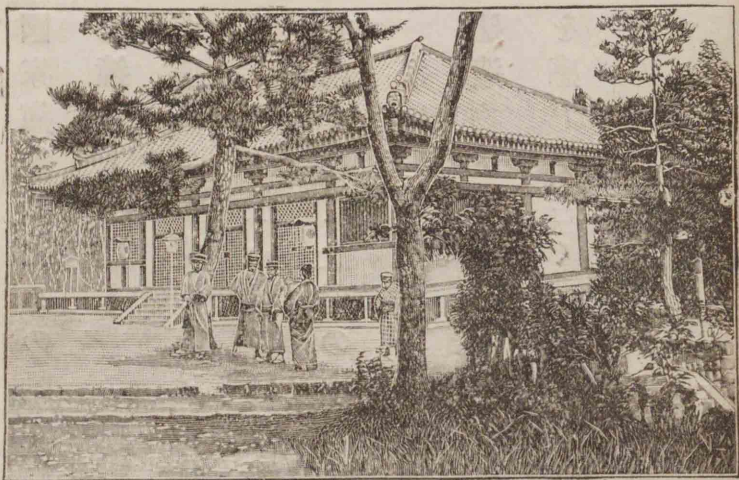


の緑と菜の花の黄とで、際涯もなく開展してゐる中を、平坦  
砥の如き奈良鐵道の軌道は一直線に生駒山の麓を目かけ  
て走つてゐる。

生駒山の長い隧道を出ぬけて、なほ二三の停留場を過ぎ  
ると、やがて西大寺の停留場が近づく。沿道の雑木山に點  
綴してゐる薄色の躑躅が、ゆく春の名残を思はしめる。こ  
の西大寺で電車と別れた。四月の末の強い日射が、東の方  
の奈良の街の藁に照り映えて、旅に疲れた私は眼を閉ちが  
ちにしてゐた。

私は車を備うて、

「西の京のお寺を巡るんだ。順々に都合のいゝやうにや



秋 篠 寺

つてくれ。秋篠寺は何處だ。」  
と訊くと車夫は、

「秋篠寺ですか、秋篠寺は、あ  
れあそこに見える松林の先  
の屋根がそれです。」

といつて、西北に見える寂し  
い村落の方を指した。

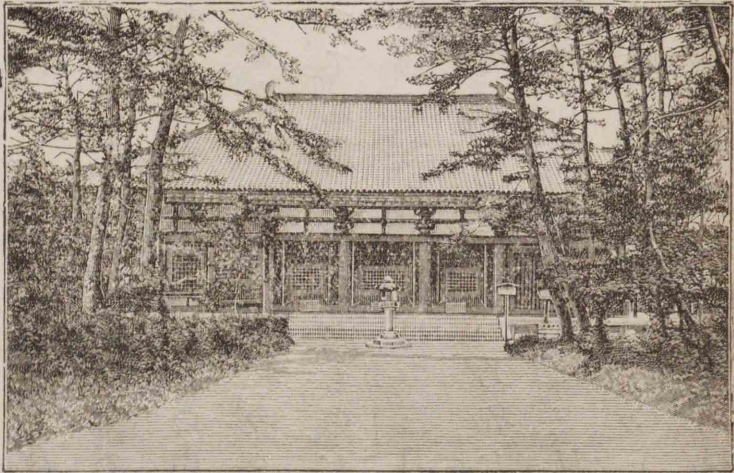
秋篠寺のある村は、貧しさ  
うな部落である。汚い百姓  
家の立ち並んだ田舎道をう  
ねつて行くと、松や雑木の生え茂つた丘の裾に荒れはてた



廢寺が残つてゐる。それが千幾百年の昔光仁・桓武兩帝が國家鎮護のための勅願に成つた秋篠寺である。今は、庫裡も鐘樓も山門も、昔の跡形もなく廢滅して探ぬる術もないが、僅かに金堂のみは千幾百歳の星霜を経て尙殘存してゐる。私は強い春の日を浴びながら、懶さうな寺番の老婆に案内されて金堂の中に入つていつた。

けれども、私はその内陣の本尊よりも何よりも、特別保護建造物なるその金堂の建築の様式に何ともいへない快感を感じて、古く歩き耗された花崗石の石廊に立つて、やゝしばらく低徊しながら建築の美を味はつた。

秋篠寺を出ると、私はまた車に揺られながら麥畑の間に



唐 招 提 寺 金 堂

つづく村々を通り、或は池の堤に沿うて行つたりして、やがて松林の一叢繁茂した寺域の外部をめぐり、南から正門に廻つて唐招提寺の本門から入つて行つた。

千百有餘年來の寺域は、古く寂びてゐるけれど、自然の雜草は、春の日とともに常に新しく、清く掃除された砂地の境内を流れてゐる小溝には、芹などが青々と伸びてゐる。



老人の寺番はやがて鍵を持つて金堂の内部に案内してくれた。本尊盧遮那佛は、乾漆の上に金色を施し、見るからありがたい丈六の御佛である。左右の脇士千手觀音・藥師如來の御像また靜寂の中に、無限の意味を表示してゐる。

金堂の北に講堂がある。それは平城宮の朝集殿を賜はつて此處に移したものださうで、金堂と同じく特別保護建築物である。奈良の三月堂などと、同じ様式の建築である。内部には、いろんな國寶や、考古の資料になる古物が陳列されてあるけれど、私にはさういふ細かいことになる感じが分析的になつて來て、却つて懷古の興趣が妨げられる。それよりも唐招提寺全體の建築物の配置、外部から

見る全景の眺望などが、私にはより多く感覺を樂しましむる力を持つてゐる。

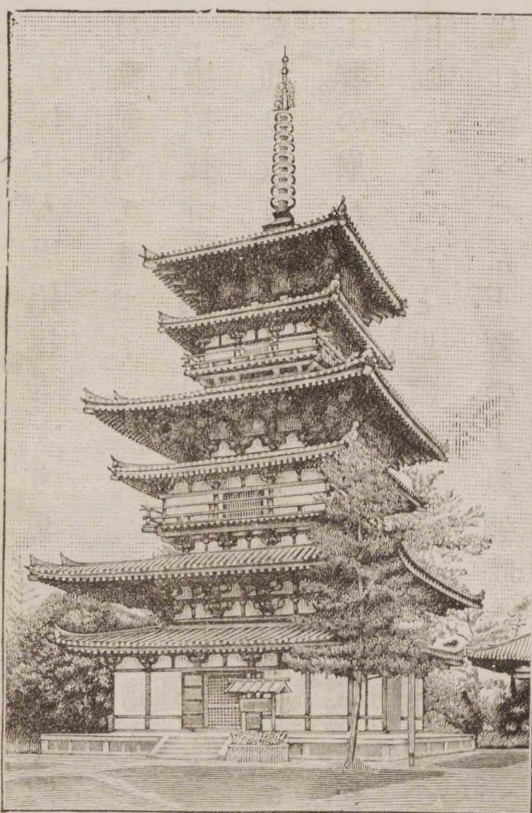
けれども、唐招提寺より更に強く私の心を引いたのは、藥師寺であつた。

唐招提寺の門前の農家の三四點在してゐる間から、村道を通り抜けて行くと、やがて廣い藥師寺の寺域の跡らしい土塀の崩れかゝつたのや、堂宇のあつた跡の切り開かれて田圃になつたと思はれるやうな處が、車の上から目につく崩れかゝつた土塀の上の遅咲きの山櫻がほろ／＼とわびしさうに咲きこばれてゐる。

さびれた寺域の裏のやうな處に柁棒を下した車夫は、私



を案内して金堂の石廊の處に立つて、  
「拜觀だす。」



藥師寺東塔

内は、ひどく荒廢に歸してゐる。彼方の金堂や講堂の一見  
直ちに特別保護建造物たることを語つてゐるに似ず、此方

と聲をかけ  
ると、すぐ鍵  
を手にした  
雛僧が出て  
來た。  
唐招提寺  
に比べて境

は何となく建築様式の拙劣なのが看取される。

雛僧は金堂の横手から扉を押開き、埃臭い内部に私を導  
いた。

「これが國寶藥師如來。左右の脇士が日光菩薩・月光菩薩。」  
と説明しつゝ、佛像の正面に廻つて行くのに躓いて行くと、  
私は思はず驚嘆の聲を發せずにはゐられなかつた。

雛僧は紫銅で出來てゐると説明してきかせた。佛體の  
色澤さながら漆の如く、鑄造後千幾百年の今日なほ滴るや  
うな光澤を存してゐるのは、寧ろ不思議といふべきである。  
面貌優美温雅にして、實にく、難有い御佛と拜せられる。  
我々佛像などに對する鑑賞眼のない者は、かゝる物に接

スルキヤヤヤ  
ユンリレテ  
フクヤヤ



しても、ただ古い物だから好いのだらうぐらゐの判別しか出来ぬ場合が多いが、此の薬師寺の三尊佛は、たとひそれが明治・大正の時代になつたとしても、歴史とか歲月とかいふ條件を超越して、米人フエノロサが、口を極めて稱揚した通り、世界無比の鑄造佛だと思はせるに十分である。

離僧は金堂を出ると、此方へといつて講堂へ導いた。そこにも同じやうに薬師三尊が安置してある。前者に比べて後者は面貌俊邁とは云へるが、前者の如き慈悲忍辱の相貌は缺如してゐる。とにかく光明皇后の様な天才的な宗教心の厚い女性の方のおはしました時代の精神は、遺憾なく是等の鑄造物に表現されてゐると思ふ。千有餘年前に、

その清浄なる佛

かゝる豊富なる宗教的情操と、それを藝術の花と咲かせた鬼方神思のあつたことを思つて、私は獨り感嘆の聲を遏めえなかつた。

(近松秋江)

### 六 西郷隆盛 (一)

彼は七八年にもならうか、丁度三月の下旬で、もうそろ／＼清水の一重櫻が咲きさうな、といつてもまだ霰交りの雨が降る、或寒さのきびしい夜の事である。當時大學の學生だつた本間さんは、午後九時何分かに京都を發した急行の上り列車の食堂で、ぼんやりM.C.Cの煙をふかしてゐた。さつき米原を通り越したから、もう岐阜縣の境に近づいてゐるに相違ない。硝子窓から外を見ると、どこも一面に眞暗である。時々小さい火の光が流れるやうに通る過ぎるが、それも遠い家の光だか、汽車の煙突から出る火花だか



判然しない。その中で唯窓を叩く凍りかゝつた雨の音が、騒々しい車輪の音に、單調な響を交してゐる。

食堂車の中はがらんとして、客はたつた一人しかゐない。斑白の老紳士で血色のいゝ兩頬には聊か西洋人じみた疎な鬚を貯へてゐる。暫くすると此の老紳士はつと立上つて、車の動搖に抵抗しながら、大股に本間さんの前へ歩み寄つた。さうしてその卓の向うへ無雜作に腰を下すと、壯年のやうな大きな聲を出して、「やあ失敬。」と聲をかけた。

本間さんは何だかわからないが、年長者の手前意味のない微笑を浮かべながら大様に一寸頭を下げた。

「君は僕を知つてゐますか。なに知つてゐない。知つてゐなければ、ゐなくても宜しい。君は大學の學生でせう。然も文科大學だ。僕も君と似たやうな商賣をしてゐる人間です。事によると同業組合の一人かも知れない。何です、君の専門は。」

Samuel Johnson  
十八世紀の  
英の著述家  
\*  
Almanac-maker  
曆の製作者  
の意。

「史學科です。」

「ははあ、史學。君もドクタア、ジョンソンに輕蔑される一人ですね。ジョンソン曰く、歴史家はアルマナツク、メーカーに過ぎない。アルマナツク、メーカー。正にそれに違ひない。いや、僕の考へる所では、それさへ甚だ疑問ですね。併し、そんな事はどうでも宜しい。それより、君の特に研究しようとしてゐるのは何ですか。」

「維新史です。」

「すると、卒業論文の題目もやはりその範圍内にあるわけですね。」

「西南戦争を問題にする積りです。」

老紳士は遽に本間さんの方へ向き直つて、鼻眼鏡の後に一種の嘲笑の色を浮かべながら、こんな事をしやべり出した。

「西南戦争ですか。それは面白い。僕も少しは事實の穿鑿をやつて見た事がある。君はどういふ史料に依つて研究されるか



知らないが、あの戦争に就いては随分誤傳が澤山あつて、しかもその誤傳が又立派に精確な史料で通つてゐます。だから餘程史料の取捨を慎まないと、思ひも寄らない、誤謬に陥るやうな事になる。君も第一にそこへ氣をつけた方がいゝでせう。」

本間さんは向うの態度や口ぶりから推して、どうもこの忠告に感謝して然るべきものか、どうか、判然しないやうな氣がしたから、至極曖昧な返事をした。が、老紳士は少しもこつちの返事などには注意しない。ポケットから瀬戸物のパイフを出して、それへ煙草をつめながら、

「尤も氣をつけても危いかも知れない。かう申すと失禮なやうだが、それ程あの戦争の史料には怪しいものが多いのですね。」  
「さうでせうか。」

老紳士は黙つて頷きながら燐寸を磨つてパイフに火を點けた。西洋人じみた顔が、下から赤い火に照らされると、濃い煙が疎な鬚

を掠めて、埃及の香をふんとさせる。本間さんはそれを見ると何故か急にこの老紳士を小面憎く感じ出した。酔つてゐるのは勿論承知してゐる。いゝ加減な駄法螺を聞かせられて、それで黙つて恐入つては、制服の金釦に對しても面目が立たない。

「併し、私にはそれ程特に警戒する必要があるとは思はれませんが、貴方はどういふ理由で、さうお考へなのですか。」

「理由。理由はないが、事實がある。僕は唯西南戦争の史料を一一綿密に調べて見た。さうしてその中から多くの誤傳を發見した。それだけです。が、それだけでも十分さういはれはしないですか。」

「それは勿論さう言はれます。では、一つその御發見になつた事實をうかがひたいものです。私などにも大いに参考になりさうですから。」

老紳士はパイフを呷へた儘暫く口を噤んだ。さうして眼を硝



子窓の外へやりながら妙にちよいと顔をしかめた。本間さんは向うの氣色を窺ひながら、腹の中でざまを見ろと呟きたくなつた。「政治上の支障りさへなければ、僕も喜んで話しますが、若し君が他言しないといふ約束さへすれば、その中の一つ位は洩らしてあげませう。」

今度は本間さんの方で顔をしかめた。こいつは氣違ひかも知れないといふ氣が、その時咄嗟に頭を掠めたからである。が、それと同時に、こゝまで追窮して置きながら見す／＼その事實なるものを逸してしまふのが惜しいやうな心持もした。そこへ又此位な嚇しに乘せられて後込みするやうな自分ではないといふ、子供じみた負けぬ氣も、幾分かは働いたのであらう。本間さんは短くなつたMCCを灰皿の中へ抛り込みながら、頸を眞直に伸ばして、はつきりとかういつた。

「では他言しませんから、その事實といふのをうかがはせて下さい。」

「よろしい。細かい事實の相違を擧げてゐては際限がない。だから一番大きな誤傳を話ませう。それは西郷隆盛が城山の戦では死ななかつたといふ事です。」

これを聞くと、本間さんは急に笑がこみ上げて來た。そこでその笑を紛らす爲に、新しいMCCへ火をつけながら、強ひて眞面目な聲を出して、「さうですか」と調子を合はせた。もうその先を聞き訊すまでもない。あらゆる正確な史料が認めてゐる西郷隆盛の城山戦死を無雜作に誤傳の中に數へようとする、それだけで、此の老人の所謂事實も略正體がわかつてゐる。成程これは氣違ひでも何でも無い。唯義經と鐵木眞とを同一人にしたりする無邪氣な田舎翁の一人だつたのである。かう思つた本間さんはをかしさと腹立たしさと、それから一種の失望とを同時に心の中に感じながら、この上は出来るだけ早く、老人との問答を切上げようと決



心した。

「しかもあの時城山で死ななかつたばかりではない。西郷隆盛は今日まで生きてゐます。」

老紳士は斯ういつて、寧ろ昂然と本間さんを一瞥した。本間さんがこれにも「はあ」といふ氣のない返事で應じた事は勿論である。すると相手は嘲るやうな微笑をちらりと唇頭に浮かべながら、今度は靜かな口ぶりで、態とらしく問ひかけた。

「君は僕の言ふ事を信ぜられない。いや辯解しなくても信ぜられないといふ事はわかつてゐる。しかし、しかしです。何故君は西郷隆盛が今日まで生きてゐるといふ事を疑はれるのですか。」

本間さんは先方の悪く落着いた態度が忌々しくなつたのと、それから一刀兩断に早くこの喜劇の結末をつけたいので、大人げないと思ひながら、口早に城山戦死説を辯じ出した。いつもの通

\*  
Ironical

り、本間さんの議論は引證の正確な、如何にも論理の徹底してゐる、決定的なものであつたが、瀬戸物のパイプを啣へた儘、煙を吹き吹きその議論に耳を傾けてゐた老紳士は、一向辟易したらしい氣色を表さない。鐵縁の鼻眼鏡の後には、相變らず、小さな眼が柔かな光を湛へながら、アイロニカルな微笑を浮かべてゐる。その眼が又妙に本間さんの論鋒を鈍らせた。

「成程或假定の上に立つて言へば、君の説は正しいでせう。」

本間さんの議論が一段落を告げると、老人は悠然とかういつた。

「さうしてその假定といふのは、今君が擧げた加治木常樹城山籠城調査筆記とか、市來四郎日記とかいふものの記事を、間違ひのない事實だとする事です。だから、さういふ史料を始めから否定してゐる僕に取つては、折角の君の名論も、徹頭徹尾<sup>\*</sup>ノンセン<sup>\*</sup>スといふより他はない。まあ待ち給へ。それは君はさういふ史料の正確な事を、いろ／＼の方面から辯護する事が出来るで

\*  
Nonsense



せう。併し、僕はあらゆる辯護を超越した確な實證を持つてゐる。君はそれを何だと思ひますか。」

本間さんは聊か煙に捲かれて、ちよいと返事に躊躇した。

「それは西郷隆盛が僕と一緒に、今此の汽車に乗つてゐるといふ事です。」

老紳士は殆ど嚴肅に近い調子で、のしかゝるやうに言ひ切つた。日頃から物に騒がない本間さんが、さすがに愕然としたのは此の時である。が、理性は一度脅されてもこの位な事で、その權威を失墜しはしない。思はずM.C.C.の手を口から離れた本間さんは、又その煙をゆつくり吸ひかへしながら、怪しいといふ眼つきをして、無言の儘相手のつんと高い鼻のあたりを眺めてゐた。

「かういふ事實に比べたら、君の史料の如きは何ですか。凡てが一片の故紙に過ぎなくなつてしまふでせう。西郷隆盛は城山で死ななかつた。其の證據には、今此の上り急行列車の一等室

に乗合はせてゐる。此の位確な事實はありますまい。それともやはり君は生きてゐる人間より紙に書いた文字の方を信頼しますか。」

「さあ、生きてゐるといつても、私が見たのでなければ信じられません。」

「見たのでなければ。」

老紳士は傲然とした調子で、本間さんの語を繰返した。さうして徐ろにパイプの灰をはたき出した。

「さうです。見たのでなければ。」

本間さんは又勢を盛り返して、わざと冷かに前の疑問をつきつけた。が、老人に取つてはこの疑問も格別重大な効果を與へなかつたらしい。彼はそれを聞くと、依然として傲慢な態度を持しながら、故らに肩を聳やかして見せた。

「同じ汽車に乗つてゐるのだから、君さへ見ようといへば、今でも



見られます。尤も南洲先生はもう眠つてしまつたかも知れないが、何、この一つ前の一等室だから、無駄足をしてでも大した損ではない。」

老紳士は斯ういふと、瀬戸物のパイプをポケットへしまひながら、眼で本間さんに「來給へ」といふ合圖をして、太儀さうに立上つた。かうなつては、本間さんもとにかく一緒に立たざるを得ない。そこでMCCを啣へた儘兩手をズボンのポケットに入れて、不承不承に席を離れた。さうして蹠踏たる老紳士の後から二列に並んでゐる卓の間を大股に戸口の方へ歩いた。

## 七 西郷隆盛 (二)

それから十分ばかりたつた後の事である。前の卓を圍んで鼻眼鏡を掛けた老紳士と大學の制服を著た本間さんとが又前のやうに腰を下してゐる。本間さんの頭には、今見て來た驚くべき光

景が一杯になつて擴がつてゐる。一等室の鶯茶がかつた腰掛と同じ色の窓帷と、さうしてその間に居睡りをしてゐた、山のやうな白頭の肥大漢と——あゝ、その堂々たる相貌に、南洲先生の風采を認めたのは、果して自分の見違ひであつたらうか。あすこの電燈は氣のせいか、こゝのよりも暗い。があの特徴のある眼元や、口元は側へ寄るまでもなくよく見えた。さうしてそれはどうしても、子供の時から見馴れてゐる西郷隆盛の顔であつた。

「どうですね。これでもまだ君は城山戰死説を主張しますか。」本間さんは當惑した。自分はどちらを信ずればよいのであらう。萬人に正確だと認められてゐる無数の史料か、或は今見て來た魁偉な老紳士か。前者を疑ふのが自分の頭を疑ふのなら、後者を疑ふのは自分の眼を疑ふのである。本間さんが當惑したのは少しも偶然ではない。

「君は今現に南洲先生を眼のあたりに見ながら、しかも猶史料を



信じたがつてゐる。併し、一體君の信じたがつてゐる史料とは何か、それから先づ考へ給へ。城山戦死説は暫く問題外にしても、凡そ歴史上の判断を下すに足る程正確な史料などといふものは、何處にだつてありはしないです。誰でも或事實の記録をするには、自然と自分で細目の取捨選擇をしながら書いて行く。これはしない積りでも、事實としてするのだから仕方がない。といふ意味はそれだけでもう客觀的事實から遠ざかるといふ事です。

そこで城山戦死説だが、あの記録にしても、疑を挿む餘地は澤山ある。成程西郷隆盛が明治十年九月二十四日に城山の戦で戦死したといふ事だけは、どの史料も一致してゐませう。併しそれは唯西郷隆盛と信ぜられる人間が死んだといふに過ぎないのです。その人間が實際西郷隆盛かどうかは自ら又問題が違つて來る。まして、その首や首のない屍體を發見した事實にな

ると、さつきも君が言つた通り、異説も決して少くない。そこも疑へば疑へる筈です。一方さういふ疑がある所へ、君は今此の汽車の中で西郷隆盛——といひたくなければ、少くとも西郷隆盛に酷似してゐる人間に遇つた。それでも君は史料なるものの方が信ぜられますか。」

「併しですね。西郷隆盛の屍體は髓にあつたでせう。さうする  
と——」

「似てゐる人間は、天下に幾らもゐます。右腕に古い刀痕があるとか何とかいふのも、一人に限つた事ではない。」  
愈どうにも口が出せなくなつた本間さんは、苦しまぎれに子供らしい最後の反駁を試みた。

「併し、そんなによく似てゐる人間があるでせうか。」  
すると、老紳士はどういふわけか、急に瀬戸物のパイプを口から離して、煙草の煙にむせながら、大きな聲で笑ひ出した。



「それはゐます。」

老人は暫くしてから、やつと息をつきながら斯ういつた。

「今君が向うで居睡りをしてゐるのを見たでせう。あの男などは、あんなによく西郷隆盛に似てゐるではないですか。」

「では、あれは、あの人は何なのですか。」

「あれですか。あれは僕の友人ですよ。本職は醫者で、傍南畫をかく男ですが。」

「西郷隆盛ではないのですね。」

本間さんは眞面目な聲でかういつて、それから急に顔を赤らめた。今まで自分の務めてゐた滑稽な役まはりが、この時忽然として、新しい光に照らされる事になつたからである。

「もし氣に障つたら堪忍し給へ。僕は君と話してゐる中に、あんまり君が青年らしい正直な考へを持つてゐるから、ちよいと惡戯をする氣になつたのです。併し、した事は惡戯でも、言つた事

は戲談ではない。——僕は斯ういふ人間です。」

老紳士はポケットを探つて、一枚の名刺を本間さんの前へ出して見せた。名刺には肩書も何も刷つてはない。が、本間さんはそれを見て、始め會つた時何處かで見たりやうな人だと思つた記憶を、やつと思出す事が出来たのである。老紳士は本間さんの顔を眺めながら、満足さうに微笑した。

「先生とは實際夢にも思ひませんでした。私こそいろ／＼失禮な事を申し上げて恐縮です。」

「いやさつきの城山戦死説などは、なか／＼傑作だつた。君の卒業論文もあゝいふ調子なら面白いものが出来るでせう。僕の方の大學にも、今年は一人維新史を専攻した學生がある。」

霏まじりの雨も、小止みになつたと見えて、もう窓に音がしなくなつた。硝子瓶に挿した菜の花ばかりが沍え返る食堂車の中に、微かな香を漂はせてゐる。

(芥川龍之助)



八 七騎落 (一)

シテ	土肥實平	子方	土肥遠平
ツレ	賴朝	ワキ	和田義盛
同	從者五人	狂言	船頭

一次第同身は捨小舟、うらみてもかひなきや、憂き世なるらん。  
 賴朝詞是は兵衛佐賴朝とは我が事なり。さても、昨日石橋山の合戦に身方うち負け、餘りに無勢に候程に、一先づ安房上總の方へ開かばやと存じ候。いかに、土肥の次郎。シテ詞御前に候。賴朝餘りに身方無勢にある間、一先づ安房上總の方へ開かうずるにてあるぞ。急いで船のことを申し付けて候へ。シテ畏まつて候。とくより御船の事を申し付けて候。

急いで召されうずるにて候。賴朝いかに、實平。シテ御前に候。賴朝只今船中に供したる人數は如何ほどあるぞ。シテさん候。ただ七騎御座候。賴朝さては賴朝までは八騎よな。きつと思出したることあり。祖父爲義奥州へ開きし時も主從八騎、父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎、思へば不吉の例なり。實平計らひて、船より一人おろし候へ。シテ畏まつて候。實平仰せ承り、船のせがひに立上り、御供の人數を見渡せば、まづ一番には田代殿。地さて二番には新開の次郎。シテ又三番には土屋の三郎。地四番は土佐坊。五番には、シテ實平候。六番には、遠平同じき遠平。シテ艦板には、義實義實あり。地此の人々は君の爲、龍門原上の土に屍をば曝



すとも惜しかるまじき命かな。いづれを擇び出さんと、さしもの實平思ひかね、赤面したるばかりなり。

賴朝詞「いかに實平何とて遅きぞ。急いでおろし候へ。」

シテ詞「畏まつて候。いかに、岡崎殿に申し候。急いで御船より御おり候へ。義實、何と、某に御船よりおりよと候や。シテ」なかなかの事。義實暫く、此の御供の内に、某一の老體にて候程に、かひがひしく御用にも立つまじきものと御覽じ限られて斯様に承り候な。其の儀に於ては、御船よりはおり候まじ。シテ「いや、さやうの儀にてはなく候。艫板に召されて候程に、陸の近さに申し候。義實、いや、所詮此の船中に命二つ持ちたらんずるものを、御船よりおろされ候へ。シテ「これ

五郎景尙、  
大場景親の  
弟。

は不思議なる事を承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで、命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂はれの候か。義實さん候。某も昨日までは命を二つ持ちて候を、早一つの命をば我が君に參らせ上げて候。シテ「さて其の謂はれは候。義實、其の事にて候。昨日石橋山の合戦に、子にて候眞田の與一義忠は副將軍を賜はり、俣野と組んで討たれぬ。されば親子は一體、二つの命ならずや。御分残つて遠平をおろすか、遠平を残して御分おるゝか、親子の内一人おりられ候へ。シテ「尤もにて候。餘りの道理に物なのためひそ。いかに、遠平、君よりの御定にてあるぞ。急いで御船よりおり候へ。遠平「何と、御船よりおりよと仰せ候か。シテ



「なか／＼の事。急いでおり候へ。遠平「幼く候へども、君の御大事に立たんこと誰にか劣り候へき。御船よりはおりまじく候。シテ「こざかしき事を申すものかな。君の御爲、父の命にてはなきか。急いで御船よりおり候へ。遠平「いや／＼、君の御爲、父の命をば背くとも、御船よりはおりまじく候。シテ「言語道斷の事を申すものかな。君の御爲、父が命をば背くともおりまじきと申すか。其の儀ならば人手には掛けまじいぞ。義實「暫く。是は君の御門出なるに、誤りたるか、實平。シテ「何處までも某が誤りて候。所詮をりまじきと申す者をおろさんより、某御船よりおりようずるにて候。遠平「いかに、申し候。さらば、某御船よりおり候べし。シテ「何と、お

大伴狭手彦  
の妻

りようずると申すか。實に／＼今こそ某が子にて候へ。あれを見よ、敵大勢討ち出でたり。構へて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名残こそ惜しけれ。かくて我が子をおろし置き、實平御船に参りけり。地「ゆゝしく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子の別れ痛はしや。遠平「父の別れは申すに及ばず、君を始め参らせて、皆人々に御名残こそ惜しう候へ。地「彼の松浦佐用媛が唐土船を慕ひわびて、渚にひれ伏しし有様も、今遠平が親と子の別れにかはらじと皆涙をぞ流しける。遠平「契程なき早船を暫しとだにもいひあへず、後を見送りたゞずめば、地「はや遠ざかる浦の波、立別れ行く有様を、遠平「餘の人々は心して、地



「あはれみあへる、遠平船の内に、實平實平はひたすらに、弱氣を見えじとて、なか／＼かへり見おきもせて、心強くも行く後に、敵大勢見えたり。すはや、遠平は討たるゝとて、頼朝もあはれみ、陸を見給へば、さすが實に、恩愛の契もただ今を限りぞと思ひ、實平は磯邊に向ひ、人知れず心のまゝならば、あはれ、遠平と一緒に討死せばやとあこがれて飛立つばかりに、思ひ子の別れぞ哀れなりける。

九 七騎落 (二)

「ウキ聲弓張月の西の空行くへ定めぬ船路かな。狂言沖なる波の音までも、関の聲かと恐ろしや。ウキ詞あれに見えた

るが、御座船にてありげに候。急いで船を漕ぎ候へ。狂言畏まつて候。

シテ詞いかに、申し候。あれに兵船一艘見えて候。先づこなたより詞を掛けうずるにて候。義實然るべう候。シテいかに、あれなる船は誰が召されたる御船にて候ぞ。ウキ我もそなたの船影を怪しく思ひやすらふなり。そも誰人の船やらん。シテ是は土肥の次郎實平が乗りたる船候よ。ウキ何と、土肥殿の御船と候や。シテなか／＼の事。さて其の御船は誰が召されたる御船にて候ぞ。ウキ是こそ和田の小太郎義盛が乗りたる船候よ。シテさては和田殿の御船にて候か。ウキなか／＼の事。内々申し通ぜし如く、御身方に參らん



爲に是まで参りて候。さて君は其の御船に御座候か。シテ  
「和田は内々申し合はせたる事の候間、只今参りて候。さり  
ながら、先づたばかり心を見うずるにて候。いかに、和田  
殿へ申し候。是までの御参りめでたう候。さりながら、面  
目もなき事の候。昨日の暮程より、我が君を見失ひ申し、か  
やうに浮かれ船となつて尋ね申し候よ。ワキ「何と、君は其の  
御船に御座なきと候や。シテ「さん候。ワキ「言語道斷の事にて  
候ものかな。我身方をば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝  
には離れ申し、此の上は命ありても何かせん。いで、自  
害に及ばん。」と腰の刀に手を掛くる。シテ「あゝ、暫く。君は此  
の船に御座候。ワキ「何と、君は其の御船に御座候とや。シテ「な

かなかの事。ワキ「さて何とてかやうには承り候ぞ。シテ「是は  
戯れ事にて候。幸に陸近う候程に、其の船をも寄せられ候  
へ。御船をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうずるにて候。  
ワキ「心得申し候。さらば、やがて陸へ参らうずるにて候。  
シテ「いかに、申し候。御前にて候。ワキ「我が君を見奉りて、  
今は安堵仕りて候。シテ「實に、尤もにて候。ワキ「いかに、土  
肥殿に申し候。シテ「何事にて候ぞ。ワキ「此の御供の内に、何と  
て御子息遠平は御座候はぬぞ。シテ「其の事にて候。さる謂  
はれあつて陸に残し置きて候。ワキ「疾くよりかくと申した  
くは候ひつれども、以前某に心を盡くさせられ候其の返報  
に、今までは斯くとも申さぬなり。いで、土肥殿に引出物申



さん。」と隠し置きたる船底より遠平を引き立て見せければ、  
シテ「其の時實平あきれつゝ、地夢か、現か、こは如何に。」とて、覺  
えず抱き付き泣き居たり。譬へば仙家に入りし身の半日  
の程に立ち歸り、七世の孫に逢ふ事の譬も今に知られたり。  
シテ詞「いかに、義盛に申し候。さて此の者をば、何として召  
しつれられて候ぞ。ワキ詞「さん候。是まで伴なひ申したる  
謂はれを、御前にて申し上げうずるにて候。シテ「急いで御物  
語り候へ。ワキ「さて、昨日石橋山の合戦破れしかば、大場が  
手勢君を討ち奉らんと、大勢渚に討ち出でたりしに某も一  
緒に討つて出でしが、汀を見れば、退きかねたる若武者一騎  
控へたり。某駒駈け寄せて、見れば御子息遠平なり。急ぎ

三郎景親

馬より飛んでおり、生捕る體にもてなし、船底に乗せ申し、是  
迄伴なひ参りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて  
候ぞ。シテ「かゝる有りがたき事こそ候はね。只今の御物語  
を聞き候ひて、落涙仕りて候を、さぞ人々の不覺の涙とや思  
召すらん。さりながら、地うれし泣きの涙は、何かつゝまん、  
唐衣、日も夕暮になりぬれば、月の盃とりどりに、シテ「主従共  
に悦の、地心うれしき酒宴かな。ワキ詞「いかに、實平、餘りにめ  
でたき折なれば、一さし御舞ひ候へ。シテ「さらば、そと舞はう  
ずるにて候。地心うれしき酒宴かな。

地かくて時日をめぐらさず、國々の兵馳せ参ずれば、程な  
く御勢二十萬騎になり給ひつゝ、掌に治め給へる此の君の



御代のめでたき始めも、實平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ。

### 一〇 眞人間

何も持つてゐないといふことは、人間として可なり寂しい生活であるに違ひない。しかし、何も持つてゐない生活を心から有り難く、尊く思ふ人でなければ、ほんとうな人生の味といふものを噛みしめることは出来ないであらう。

哲人ソクラテスは、知識の究竟は「自分は何も知らぬ愚者」といふことを意識することであると言つた。智者に取つては、自分の無智なることを心から覺るのが、唯一つの救の

道でなければならぬ。

金を持つた者に取つては、金を捨てることが唯一つの救の道でなければならぬ。官位を持つた者に取つては、官位を捨てることが、彼自身を救ふ最後の方法でなければならぬ。「ソロモンソの榮華も野の百合に及ばざりき」と言つたキリストの言葉は、決して譬喩的な美辭ではない。野の百合は百合であるが故に、ソロモン王の榮華にも勝る幸福を持つことが出来たのであつた。ソロモンの生活は、王といふ權威に囚はれたが爲に、ほんとうな人間の幸福を持つことは出来なかつた。ソロモンがもし眞人間の生活を持つことが出来たならば、彼も亦野の百合と同じ生活の幸福を味

バイブルの  
中の語



はふことが出来た筈である。私達は何物をも持たぬ眞人間であることを祈らなければならぬ。自然のまゝの人間であることを求めなければならぬ。嬰兒であることを冀はなければならぬ。私達は富を持たぬことの爲に、毎日どれほどの苦痛や屈辱やを忍ばなければならぬか知れぬ。私達は貧しかつたが爲に、富める人達の夢にも知らぬやうな、いろ／＼な涙をも経験しなければならなかつた。私達は貧しいといふことを呪つたことも多くあつた。しかし、私達は貧しいことの爲に、自分の魂を傷つけてはならぬ。自分の素直な魂をいびつに曲げてはならぬ。

私達は貧しければこそ、人間の世の美しい同情や、愛や、涙といふことをいやといふほど味ははせられたのであつた。また苦痛といふことをも味はつた。涙があり、苦痛があつてこそ、私達の魂は練られ、磨かれ、豊かにされ、伸び展げられて行く。

しかし、涙や、苦痛は一方では私達の魂を大きくし、深くし、人間らしくする機縁であるが、同時に涙や、苦痛は私達の魂をいびつにしたり、頑カクマシにしたりする力をも持つてゐることを忘れてはならぬ。

悲しみや、苦痛は神の鞭である。素直な心の人にとつては、神の鞭は自分を一層正しく、善くするものである。けれ



ども、邪な心の人に取つては神の鞭は、かれ自身をますます正しいことや、善い事から遠ざけるものとなる。

私達は自分の心を素直に保つて、日々の苦痛や、涙を感謝しながら受け容れなければならぬ。

私達が正しい人間となつて、正しい人間の生活をすることの出来る機縁はいつでも、そしていつこにでも存在してゐる。

貧しいといふことも、私達をして人間らしい生き方を味ははせる一つの尊い機縁である。裏切られたといふ苦しきも、偽られたといふ悲しみも、人一倍不運であるといふ意

識も、私達に取つてありがたい機縁でなければならぬ。更に自分ただ一人が世界に孤獨であることを見出す寂寞も自分に取つては尊い機縁でなければならぬ。

＊  
バイブルの  
中の語

「富めるものの天國に入るは、駱駝の針の孔をくぐるよりも難い。」といつたキリストの言葉は眞實である。更に「悲しみあるものは幸なり、その人は慰めを得べければなり。」と言つた彼の言葉は、實際涙なしには受け容れられないほどの尊い眞人間の言葉である。

私達は貧しいこと、愚なこと、悲しみを持つてゐることを感謝しなければならぬ。そこから天國の門が開かれるからである。



「何のその百萬石も笹の露。」とうたつた俳人一茶の意氣は眞に平民の幸福と矜恃（たかぶり）とを味はつたものでなければ掬（く）ぶことは出来ぬ。俳人一茶に取つては、加賀百萬石の權勢よりも、彼自身の魂の自由が尊かつたのであつた。

私達は、自分の魂の無限に尊いことを、ほんとうに自覺しなければならぬ。官位に魂を賣るものがあり、黃白に魂を賣るものがあり、虚榮に魂を賣るものがある。

家を捨て、富を捨て、官位を捨て、學問を捨て、衣を捨てて、素裸の人間となつた時、始めて眞人間の魂が現れる、眞人間の魂が見出される。

一枚の美衣を装ふことはやがて自分の魂の上に一個の

重石を積むこととなる。更に土地を所有する時、家を所有する時、官位を得、黄金を積む時、私達は自分の魂の上に重荷を積み重ねてゐることに氣付かなければならぬ。自分の魂を賣つてゐることを悲しまなければならぬ。

空の鳥は土地を持たず、家を持たず、官位を持たざるが故に、ソロモン王にも勝つた生活の幸福と自由と光榮とを持つてゐる。

私達のもつともつと、貧人の幸福を心から意識しなければならぬ。

(吉田絃二郎)

### 一一 笛吹と王との話



或ところに一人の笛吹があつた。それはごく息の短い笛吹であつた。彼は或晩水邊に出て、そのほとりに、手近にあつた葦を取つて細い笛をつくつた。さうしてひとりの自分自身を慰めようと、丘から登つて来る月に對して吹いた。短い息をかぎりに吹いた。笛の音は悲しく響いてそよかな風と月のなかへ縊絲になつて織り込まれて行つた。偶、きらびやかに星空のやうに着飾つた貴人があつて、象牙の長椅子に横たはりながら、風と月の光との中に笛の音を感じて涙を流した。さうだからと言つて、彼の聞いた笛の音が、それほど妙であつたとばかりは言へない。何故かといふのに、氣紛れな貴人はこの夜の最も氣紛れな心で、その

の夜にはどんな聲にでも——蛙の聲にでも泣いて見ようと用意してゐたからである。

貴人といふのは、その國をしろしめす王であつた。王は布令を出して昨夜の笛吹を捜し出させた。貧しい笛吹が彼の面前に慄へて出て來た時に、彼にもう一度吹けと命じた。笛吹は命ぜられるがまゝに、吹かなければならなかつた。毎日毎日、息の切れてゐる笛吹は、氣の毒にも後から後から幾度も幾度も吹いた、吹かなければならなかつた、——もつとも喘ぎ喘ぎで。それらの笛の音が全く聞き苦しいものであつたことを知つた者は、當の笛吹自身であつた。或日、ひとり人にかくれて彼の唇が悲しさうにひとり言



を言つた。

「耳よ、私の耳よ、お前は どうして聾ではなかつたのだ。」  
すると耳が悲しきうに答へた。

「若しも私が聾であつたら、私の唇よ、お前は笛を吹くことが學べなかつたらう。併し今日となつては、私も私の聾でないのが悲しい。お前は拙く吹く。しかも人々は褒める。私の辛さは二倍になる。」

かくて或晩、それは月も星もない晩であつた。笛吹は宮廷樂人の最も美しい青い服を脱ぎ捨て、彫りのある銀の笛を遺し置いて、素裸で王宮の城壁から飛び下りた。——其處から逃げ出さう、さうして再び自由に自分自身のため

にのみ吹かう、ふるへる葦の笛を吹かうと思ひつめながら。併し王の城を逃げそこねた笛吹は、夜明に王の鎧をつけた家來に見出された、傷ついて倒れて。

彼は最も手篤い王の志にも満足しない慾深い増長した男として、王の怒の爲に、もう死ななければならなかつた。

「身の程を知らぬ奴の、別々になつた首と胴體とを物見の塔に曝せ、秃鷹にくはせよ、今直ぐ。」

と王が言つた時、最後のただ一つの願だけはやつと許されて、裸で土の上に坐つた笛吹は、不運な運命の自分を泣き、また彼の唇は彼の耳に永の別をしようとも、もう一度息をかぎりに吹いた、嘲弄のうちに彼に與へられた麥稈の笛を。



「お、ほんたうにそれをおれの唇が吹いてゐるのか。悲しさは限りなく、それ故美しさ限りのない最後の細い一曲が心に沁みた時、笛吹の耳は感に堪へず、笛吹の目は涙を流した。彼を取圍んだ人々の目もそれに同じかつた。さうして人々は、この哀れな笛吹を王は多分もう殺すことを赦すであらうと考へた。何故かといふに、彼等が王の顔色を偷み見た時、王の目も涙で光つてゐたから。併し王は叫んだ。」「早く、早く殺せ、何故ためらふ。」

それから、王はいら立つて言ひ足した。  
「己が喜の曲を聞きたい時に、そ奴は最も悲しい曲で己の心に謀反した。」と。

(佐藤春夫)

## 一二 法隆寺の鐘

山門を這入ると、すぐ右側に寫眞や寶物の説明や、くさくさのものが並べてあり、蒲團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあん」と呼んだが返事が無い。鐘がゴーンと鳴る。案内者はだまつて猿臂を延ばして戸棚の横から長い鍵を出して我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見返りつゝ、其の後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んでコツ／＼とこねくが、どうしても開かない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は鍵を突込んだまゝ、鐘樓の方に行く。見ると二階建のやう



になつてゐる鐘樓の下に、袴とも腰衣ともつかぬやうなものを腰に纏うた一人の男が

長い綱を持つて立つて居る。

我等も案内者のあとについて行く。

男が綱をゆるめた

と見ると鐘がゴーンと鳴る。

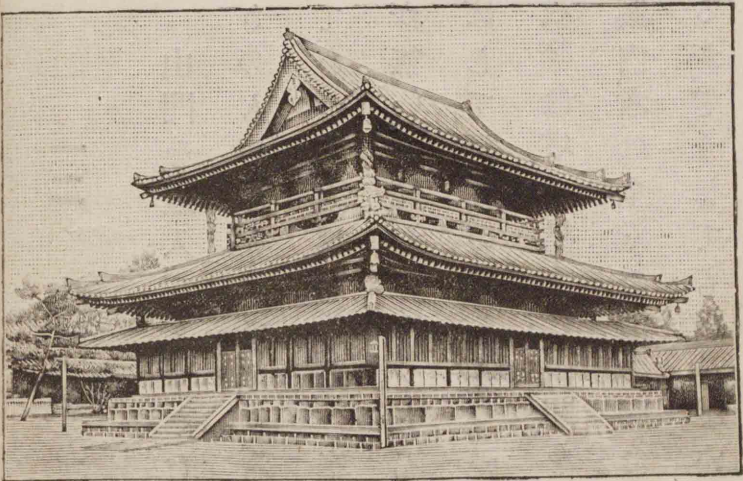
「八さん、開けておくれ、わたし

が其の間撞いてるさかい。」と

案内者は代つて綱を持った。

寺男は黙つて綱を渡して、金

堂の方に走つて行つた。案



法隆寺金堂



法隆寺鐘樓

い。薄暗い處に、細長い形をした餘り大きく無い鐘の、青錆

内者は一二三四と口のうちに

で撞木の揺れる數を數へて

五つ目に綱をゆるめる。さ

うすると撞木が鐘に當る。

ゴーンと鳴る。嘗て佛蘭西

から日本の美術を調べに來

て居た人が特に此の寺の鐘

を賞めてゐた事を思ひ出す。

見上げると、他の寺の鐘樓と

は違つて鐘は露出して居な



が品よく古色を呈して附いて居るのが、窓から射し入る光線で朧氣ながら見える。撞木が鐘に當ると、ゴーン、ゴウゴウゴウゴウと靜かに遠くへ傳はる響にも、上代の音がある。余は堪らなくなつて、どうか僕にも一度撞かしてくれぬかと案内者に頼んで、教はるまゝに一二三と數をくりつつ五つ目に大きく引いて綱を離した。撞木が當るは當つたが纔かに音を發したばかりで涼しい清い梵音は出なかつた。残念に思つて今一度と數をくつて又綱をゆるめた前よりは、やゝ善い音を出したが、それでも心耳を澄ます音では無かつた。同行の把栗が「僕にも一つ撞かしてくれ」と綱を持つて撞いた。同様に力無い響であつた。漸く金堂

を開けた寺男は歸つて來て、「そんな撞き様をしてはどもならん」と綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に復つた。

我等の撞いた鐘の音を法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながら其の力の無い音に耳を聳てて、佛力の俄に斯くも衰へたるかと、定めて驚いた事であつたらう。併し其は唯三撞きであつた。四撞き目は再び元の音に戻つて天日は舊の如く明らかになつた。嗚呼、此の靈鐘を瀆した罪は深い。併し、法隆寺始まつて以來、佛法の混ぶる迄、此の寺の鐘は何萬遍鳴ることであらう、何億遍鳴ることであらう。何億遍でも善い。其のうちの二遍だけは余が撞いた



鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次ぎの世に此の罪深い余が萬々一にも佛の國に生れるやうな事があるならば、其は慥に此の二撞きの鐘の音による事と信ずる。

此の村は砧も法の響かな。

(高濱虚子)

### 一三 乃木大將の殉死

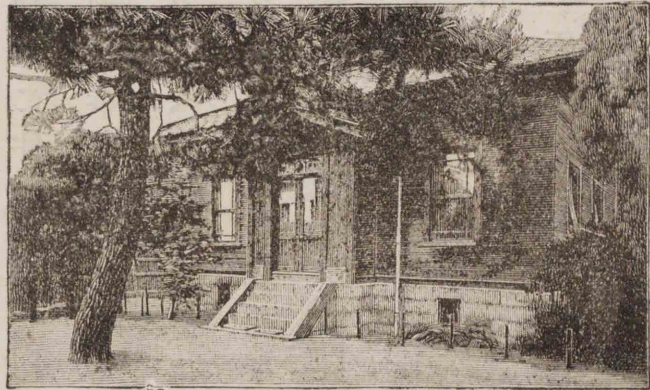
乃木大將の自殺は深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟も心あるものは皆自己に與へられたる一大鉗槌として、これを受用するを禁ずる能はざりき。しかれども、乃木大將自殺の目的こゝ

に存したりとするは、是決して大將の本意ならじ。恩賞は功勞に伴なふ。然れども恩賞を得んが爲に、身を挺して君國に奉じたりとするは、忠臣義士の心を商賣根性視するなり。大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道人心に善用するは吾人の責任なり。されど、後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自殺したりといふに至りては、乃木大將の心事を誣ふるも亦甚だし。

吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、其の遺言書の第一條に於て盡くしたり。曰く  
自分此度御跡を追ひ奉り、自殺候處恐入候。其の罪は不



輕存候。然る處明治十年役に於て軍旗を失ひ、其の後死



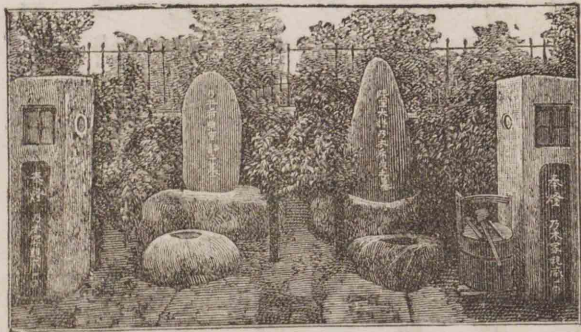
乃木大將の邸宅

光明なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

處得度心掛候へども其の機を得ず。皇恩の厚きに浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰最早御役に立ち候時も無餘日候折柄、此度の御大變、何とも恐入候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

と。大將自殺の行徑や此の如く明白なり。其の心事や、此の如く

吾人はこゝに大將の事歴を説くの煩を必要とせじ。大



乃木大將夫妻の墓

將は事ある毎に、其の死處を尋ねたるを知れば足る。三十七八年戦役に際し、大將は第三軍の將として出征したり。其の責任や實に重大なりき。二兒と共に家を出づるに當りて、大將は三棺を並べざれば葬送する勿れと家人を戒めたりといふ。山川草木轉荒涼。十里風腥新戦

場。征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にして之を讀む、尙黯然たら



ざるを得ず。況や此の時に於て、大將は其の一子を失ひたりし事實を知る者は、大將胸中の暗涙萬斛なりしを察して、自ら泣かざらんとすとも能はざるべし。大將は本來多情の質なれども、武士道の鍊磨によりて剛腸の武夫たりしなり。日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして、これを壓窄するにありき。二首二十八字、字々これ血涙の結晶なり。

旅順攻圍軍は古今未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊大隊さては聯隊の全滅さへ繰返されたり。而して豫期より半歳を超過して漸く開城を見るを得たり。大將は此の役に於てまた他の一兒を失ひたり。此の如くして二

棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

王師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。愧我何顏看父老。

凱歌今日幾人還。

大將は實に一將功成萬骨枯の事實を痛感したり。鋭敏なる良心、責任心、廉恥心はまたもや大將を驅りて、幾回か自決せしめんとしたり。されど、餘儀なく大將は徐ろに其の死處を待ちたり。

三十七八年以後の大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧なりき。然も獨善はその屑しとする所にあらず。大將は結髮以來、尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學びたり。而して滔々たる世潮に對して、及ぶ限りこれを矯正し、躬か



ら行ふ所を以てこれを及ぼし、以て大義・大道を支持せんとしたり。大將を學習院長に擢用し給ひたるは、先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に置きたるものといふべし。

三十七八年戰役以來、孤獨なる家庭、淡枯なる生活中に表したる自損利他、奉公獻身の精誠は、深く先帝の鑑獎嘉諒し給ふ所となりたり。嘗て大將を擧げて軍職に大用せんとの議を上りしものありしが、先帝は固く執りてこれを容し給はざりきと傳ふ。畏けれども、これ大將を以て人の師表たるべきものと御推信ありしが爲なるべし。大將の進路は曲折あり頓挫ありて、決して和易輕快なりといふを得ざれども、其の晩節に於て、かくまでに聖天子の知遇を辱うし

たり。大將が鞠躬盡瘁、老の將に至らんとするを知らざりし心事、以て察すべきにあらずや。

然るに、此の人にして先帝の御大患に逢ひ、崩御に逢ひたり。思ふに、大將は代らるべきものならば、身を以て代り奉らんと祈りしならん。最後まで確持したりし御平癒の希望は、終に水泡に歸したり。こゝに於てか、一死を以て先帝に殉し奉りしは、餘人にありては知らず、大將に於ては極めて自然の事なり、尋常の事なり。毎に求めてやまざりし死處は、こゝに偶然に發見せられたるなり。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず、況や他人に當てつくるが如きは、大將の夢想だにせざりし所なり。



うつし世を神さりましし大君の

み跡慕ひて我はゆくなり。

心事は唯此の如きのみ。蓋し乃木大將は先帝に殉し、大將夫人は大將に殉したり。大將夫妻の死は、宛も先帝大喪儀の最も莊嚴悲哀なる誄歌を合奏したるものなり。此の如くして豫期せられたる三棺は豫期せられざる機會に四棺となりぬ。乃木家闔門、皆國事・王事に斃れぬ。明治・大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古不朽の一大悲史は此の如くして出で來れり。嗚呼哀しいかな。

(徳富蘇峰)

一四 近世佳調 (和歌)

うらく／＼とのどけき春の心より

にほひ出でたる山櫻花。

賀茂 眞淵

秋の夜のほがらほがらと天の原、

照る月影に雁鳴きわたる。

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷺の

翼もたわに吹くあらしかな。

墨田川蓑著て下す筏士に、

かすむ朝の雨をこそ知れ。

加藤 千蔭



墨田川堤に立ちて船待てば、

水上遠く鳴くほととぎす。

大空はそこはかたなく霞む野に、

聲のみ落つる夕雲雀かな。

村田 春海

心あてに見し白雪は麓にて、

思はぬ空に晴るゝ富士のね。

波となり小舟となりて、夕暮の

小澤 蘆庵

雲の姿ぞはては消え行く。

人の世の富は草葉に置く露の、

風を待つ間の光なりけり。

事もなき野邊に出でても見つるかな、  
香川 景樹

もすが鳴く音のあわたたしさに。

むら山の高ねくをつたひ来て、

富士の裾野にかゝる白雲、



きのふまで我が衣手にとりすがり、  
父よ〜といひてしものを。

井手 曙覽

髪白くなりても親のある人も

多かるものを、あはれ親なし。

鶯の鳴く一聲に忘れけり、

大隈 言道

何處にか行く我が身なりけむ。

遠くありてよそより見れば、いつもいつも

行きかふ人はゆたけかりけり。

### 一五 武藏野の路

武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美はただ縦横に通ずる數千條の路を、あてもなく歩くことに由つて始めて獲られる。春夏秋冬、朝晝夕夜、月にも雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただ此の路をぶら〜歩いて、思ひつき次第に、右し左すれば、隨所に吾等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はいしみ感じて居る。武藏野を除いて、日本に此の様な處が



何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。其の外何處にあるか。林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが、斯の様に密接して居る處が何處にあるか。

されば、君若し一の小徑を歩き、忽ち三條に分れる處に出たならば、困るには及ばない、君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或は其の路が君を小さな林に導くかも知れない。迷はず行き給へ。林の中ごろに到つて又二つに分れたら、其の小なる路を選んで見給へ。或は其の路が君を妙な處に導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ竝んで、其の前に少し計りの空地があつて、其

の横の方に女郎花など咲いて居るといふ様な處だ。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら君の幸福である。すぐ引きかへして、左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて君の前に見わたしの廣い野が開ける。足もとから少したら／＼下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が、日に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に脊の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集まつて居て、雲の色にまがひさうな連山が、其の間に少しづつ見える。十月小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた廣い景色が隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだ



らう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄み、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の畔には、枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の畔の徑を暫く行くと又二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處高い處と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を得たいと求めるからで、それで其の望は容易に達せられない。見下す様な眺望は決して出て來ない。それは初からあきらめたがいゝ。

若し君が、何かの必要で道を尋ねたく思はば、畑の中に居る農夫に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲

を上げて尋ねて見給へ。驚いて此方に向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。大様に教へてくれるだらう。怒つてはならない。これが東京近在の若者の癖であるから。

教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた道は餘りに小さくて少し變だと思つても、其のまゝに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。なほ變だと思つてはいかぬ。其の時農家でまた尋ねて見給へ。門を出るとすぐ往來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると果して見覚えのある往來だ。なる程



これが近路だたと君はすぐ微笑をもらすに相違ない。其の時始めて教へてくれた道の有難さがわかるだらう。眞直な路で兩側共十分に黄葉した林が四五町も續く處に出る事がある。此の路を獨り靜かに歩むことのどんなに樂しからう。右側の林の頂は夕陽鮮かにかがやいて居る。をりく落葉の音が聞える計り、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉落ちつくした頃ならば、跡は落葉に埋もれて、一足毎にがさくと音がする。林は奥まで見すかさず、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、偶

一羽の山鳩のあわただしく飛去る羽音に驚かされる。同じ路を引きかへして歸るは、愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困る事もあるまい。歸りも矢張りあらましに方角をきめて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると思はず落日の美觀を獲る事がある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染みて、見るがうちに様様の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つて、終は暗澹たる雲のうちに没してしまふ。日は落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れんとして寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。



顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさうである。突然また野に出る。君は其の時、

谷口蕪村の句

山は暮れて野は黄昏の薄かな。

の名句を思ひ出すだらう。

(國木田獨歩)

### 一六 「鷹が渡る」

「鷹が渡る」といふ鋭い聲が、秋の空氣を突抜けて、村の一隅から起る。同じ聲が他の一隅にも起る。稲の穂波の黄ばみわたつた田の中からも起る。椿や竹の森に隠れた家からも起る。時は愁人の膚そぞろに寒き十月の頃、渡り鷹の

一群が南を指して、秋の空を渡り行く偉觀は余が故郷なる大隅の南端を除いては、日本國中何れの地にも見ることは出来まい。

嘗て余は黒潮の流を下つたことがある。流の早い海峡を通過したこともある。深碧の潮の流は直径十數町に亘る一大圈を劃して、盛んに渦を巻き、眞白い泡を表面に漲らして、汽船をも巻き込み、岩をも押流すやうな勢で流れて行く。雪寒き朔北の天地から、椰子の葉青く、風薫ばしき南洋の冬に渡つて行く、一種の鷹は、まさに此の潮流と同じく大空を廻轉しつゝ、進んで行く。而して又同じく偉觀である。音を發すると間も無く、空に吸ひ込まれる、花火の烟ほど



の雲もなき秋の空は、日本晴れに晴れて、天上には祕密の隠れ家もなき時、南を指して雙翼をのぼした、此の避寒客の數は、十萬か、五十萬か、はた百萬か知らぬ。初鶉位に見えた一群の鳥は、高く舞ひ騰る爲に、障害物もない大空に、直徑數町もある一大圈を畫し始める。一隊が一廻轉したか、せぬかといふ頃になると、鶉ほどに見えた形が雀位に小さくなる。すると、一隊は一先づ南方に流れ出す。夢のやうにすうと飛んでは、翼をせはしく使ふさまは隼に似てゐる。暫くすると、又廻轉し始める。雀ほどな影は更に遠ざかつて糠蟲ほどになる。更に又流れ出す。かくして廻轉を繰返し行く間に、一個々々の影は青絹の上に落した墨痕のやうに見

える。而して一隊が南に去れば、後の一隊が其の後を襲ふ。後の一隊が遠ざかれば、又其の後の一隊がこれに續く。しかもこの大集團に一羽の外れるものもなく、聲を立てるものもない。「恰も南より北に奔る天の川が、あらゆる星の影を掠めて、晝の間を逆に流るゝが如くに見える。百萬の師が隊伍肅々として萬里遠征の途に上るさまをも想像させる。神韻縹渺たる詩集の一卷を繙くやうな心持にもなる。」  
 「鷹が渡る。」といふ聲が、此の時村の何處かに響き渡ると、直に全村の注意を惹く。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して、空を仰ぎ、手を拍ち、地だんだ蹈んで、「鷹よ、鷹よ。」と小さい喉も張り裂くるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝して



やる。老人は靱を一杯に干した庭に滑り下りて、見えぬ眼を擦りつゝ、青空を見上げて過去幾十年の秋の記憶を繰返す。黄ばみ渡つた畑に立つ夫婦は、しばし鋏の手を休め、頭の手拭を取り去つて、顔の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ、互に相顧みて、更に笑顔に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どんだん南に去る。見送る人の心はさまざまであらう。

裏の畑に穂を摘む鶏は、げげんな顔を上げ、長く伸ばした頸を傾けて空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いたやうに騒いでゐた群雀は「チュ〜」といふ一羽の合圖にびたりと鳴りを静め、ひれ伏して、笹蔭から天上の行列を送る。茅葺きの屋根に秋の日を浴びて、睦ましく遊んでゐた家鳩

の夫婦は、あわただしく我が巢に引籠つて、空を仰ぎ見るところすら敢へてしない。渡り鷹の大奇隊は蠢々たる地上の影を顧みもせず、悠々として南に去る。

かくて前後一二里に亘る大軍は、僅少の殿軍を除けば、時餘にして全く通過し、それより三四里を距つる地に蜿蜒として南方の空を壓する。五千尺以上の山脈を眼下に見、進んでは佐多岬の燈臺を兒戯と觀て、洋々たる大洋を昨日も今日もと南に越えて行くのであらう。目的とする處は臺灣か、フィリッピンか、但しは南洋の島々か。

「鷹が渡る。」余は弱冠にして家を出で、故郷の秋に背くところゝに十幾年である。併し身は何處の境に在つても、こ



の一語を想ひ起せば、直に故郷の遠山・近岳・山村・水郭を背景として、渡り鷹の大軍が、一大バノラマの如く眼前に浮かぶ、眼を閉ちても去らぬ。それと共に、幼時の秋の記憶は余の脳裏に黒潮の如く渦巻き、渡り鷹の如く廻轉する。

(野村傳四)

一七 日二題

(一) 大海の日の出

枕を撼す濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過ぎにもやあらん、海上なほほの暗く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に浴して燻りたる樺色の横たはるあり。上りては濃き孛藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を掛く。光さやかにして、さながら東瀛を鎮するに似たり。左手に黒くさし出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には廻轉燈ありて、陸より海にかけて連りに白光の環を畫がきぬ。

暫くするほどに、曉風冷々として青黒き海原を掃ひ來り、夜の衣は東より次第に剝けて蒼白き曉の波を踏みて、此方へ此方へと近寄る状も指點すべく、磯の黒きに、濤の白く打ちかゝるさまも漸く明らかになり來りぬ。眼を擧ぐれば



黄金の弓と見し月も、何時か白銀の弓とかはり、燻りて見えし東の空も次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森々たる海原に立つ波の腹は黒うして、背は蒼白く、夜の夢は猶海の上にさまよへど、東の空已に臉を開きて、太平洋の夜は今明けんとするなり。

已にして曙光は花の發くが如く、圓波の廣まるが如く、空に水に廣がり行きて、水愈、白く東の空益、黄ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、はてはありとも見えずなりぬ。此の時、日の使ともおぼしき渡り鳥の一行鳴き連れて、海原をかすめて過ぐれば、大瀛の波といふ波は、盡く爪立ちて、東の方を顧み、一種待つあるのさざめき——聲なき聲四方に満つ。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空見る／＼金光射し來り、忽然として猩紅の一點海端に浮かみ出でぬ。すはや、日出でぬと思ふ間もなし。息もつかせず、瞬く間もなく、海神が手もて撃ぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一搖して、名残なく水を離れつ。水を離るゝ其の時遅く、萬斛の金、たらく／＼と昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く太洋を走ると思へば、眼下の磯は忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。

(二) 相模灘の落日

秋冬風全く凧ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世に斯かる平和のまた多かるべしとは



思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、その全く沈み終るまで、三分時を要す。

初、日の西に傾くや、富士を始め、相豆の連山は煙の如く薄し。日はいはゆる白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細くせるにや。

日更に傾くや、富士を始め、相豆の連山次第に紫になるなり。日更に傾くや、富士を始め、相豆の連山、紫の肌に金煙を帯ぶ。

この時、濱に立つて望めば、落日海に流れて、我が足下に到り、海上の舟は皆金色を放ち、逗子の濱一帯山といはず、砂と

いはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に千むを覺ゆ。

物あり、融然として心に沁む。喜といはんは過ぎ、哀しみといはんは未だ及ばず。

已にして日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍に變ず。唯富士の頂、舊によつて紫上更に金光を帯ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜みそめぬ。日一分落つれば、海に



浮かへる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ち行く。已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、——忽ちにして無し。眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。しかも餘光忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿後實に此の如し。日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて、西空の金は、朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き孛藍色となり、日の遺藁とも思ふ明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の日出を約するが如きを見るなり。

(徳富蘆花)

## 一八 霧の野尻湖

北國街道の上には夏草がのびてゐた。

柏原から野尻湖まで一里ばかりの間、朝霧が深くかゝつてゐて、路上の草には露が重かつた。汽車をおりて始めて草鞋に大地を踏んで行くと、久し振りで旅の心が鮮かに感じられた。

柏原には一茶の俳諧寺の在ることは聞いてゐたが、霧が深くて見に行く氣にもなれなかつた。何處の國道沿ひにも見る破驛の姿は此の村にも見られた。桑の葉の蒸され



たやうな臭ひと、上簇期に近い夏蠶の臭ひとが、家々の戸口から洩れて路上に漂つてゐた。

村を出抜けると、霧の間から白樺の林の樹幹だけが、ぼんやり両側に見えて來た。しとくと草を踏んで行く自分の草鞋の足音だけが耳にはいつた。ふと立ち停ると、急に周圍がしんとして來る。霧が一層濃く覆ひかぶさつて來るやうな氣がする。その中で霧が林の木の枝に引つかゝり、白樺の簇葉にからまつて、やがて重い露となつて、ぼたぼたと草の上へ落ちるのが聞える。

今まで動かずに深くく集まつてゐた霧が、次第に少しづつ流れ出した、濃淡のけぢめを見せた周圍に流れ出した。

上の方へ、林の頂へ逃げるやうに昇つて行く。下の方へ、草叢の中へ低く匍ふやうに迷ひこむ。その中間を透して、豆畑や、粟畑や、草原や、白樺の幹やが、ぼんやりと見えて來る。農家の一二軒處々に立つてゐるのが目にはいる。

太陽は晝間見る月のやうに、ただ薄白く、霧の薄れた中から、形だけ見せるけれど、光をば散らさない。その形も見えなかつたかと思ふと、すぐ霧の中に隠れてしまふ。ふと鶯の聲が白樺の林の中から聞えて來た。霧の中に籠められたその聲は、秘めた歡樂をうたふやうに、低い平原國を追はれたものが、山の中に来て思ふまゝの自由を享樂してゐるやうに、誰憚らず歌つてゐる。



霧の薄れて行く林の中から、蟬の聲がまた聞え出した。迷つてゐるものに道を教へるやうに、日中が近づいて來ることを告げるやうに。身をゆすぶり、木をゆすぶり、林をゆすぶつて、立ち罩めた霧を追ひやるやうに鳴き出した。

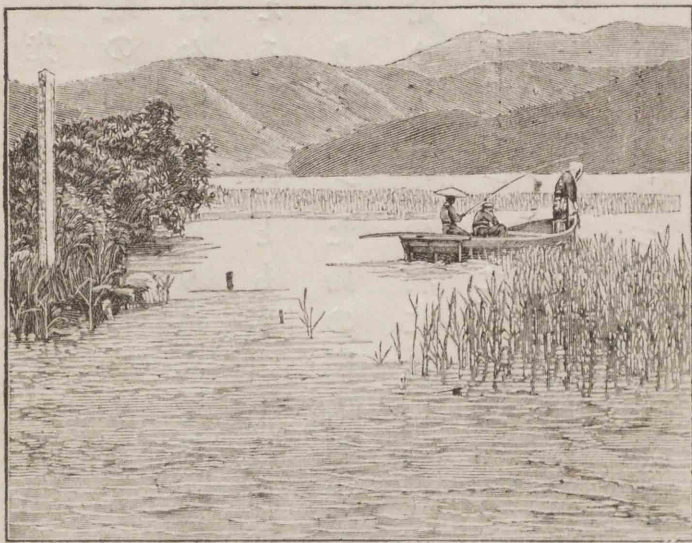
蘆のこんもりと群立つてゐる姿が處々に見え出した。水が次第に近づいて來たことを思はせる。その中からけたましい行々子の聲が聞えて來る。何かの警告を與へるやうに、今まで黙つてゐたものが、不意に目を覺ましたやうに。

今まで黙々として動き廻つてゐた霧が、天地を我がもの顔に領してゐたのだが、今度は一つ／＼聲を立てて飛び廻るものの生命が目を覺まして來た。

先の方に山の裾が見え出して、その裾をめぐつて曇つた鏡の面のやうに、水面がぼんやり霧の中に浮かんで見える。山々の間に入り込んで、彼處にも、此處にも光の無い水が見える。けれども、水の上は他所よりも明るい。樹林のこんもりと茂つた島の影も見える。小高い途が少しづつ降り始めて、野尻の村にはいつて行つた。此處にも昔の宿驛の迹が残つてゐた。店家があり、舊い大きな家があり、それらが大方は戸を閉ちてある。日は少しづつ光を増して來た。湖面は少しづつその光を照り返して、周圍の緑がきら／＼と輝き出した。私は急いで家と家との間から、稻田へ出て、



その畦の小徑を湖水の岸まで歩いて行つた。



び寄るその音が、楽しい囁きとなつて、耳から胸へ、胸から體

湖に向ふ者の心の静け

さ。自分が何處をどう歩

野いて來たかも忘れて、突然

その岸へ連れて來られた

尻やうな氣がする。波の静

けさ、伸びやかさが、心を静

湖める。波は柔かい手で撫

でるやうな氣がする。び

つしや、びつしやと岸へ忍

軀全體へ軽く行き互る。浅い水の中から岸へ續いて、一面に生えてゐる浅緑の蘆の葉が光をおこし、人の魂をその中へ吸ひ込む。その中に包まれて立つてゐるものの心は、緑の光となつて四方へ漂うて行く。湖上の霧は低く迷うて、山の間へ奥深く人を誘ふ。

心の引きしめられる心持、固く唇を結んで目を見張る心持、それは海の與へてくれる命である。湖の岸へ來て立つてゐる時、人の心は和み、静まり、軽い優しい微笑が唇邊に漂ふ。霧をくぐつて水の忍び寄る優しい響、私はそれを耳にしながら、暫く黙つて水面を見つめて立つてゐた。

岸に近い宿屋から、一艘の船を仕立ててもらつて、湖上を



巡ることにした。

「こんな處にこんな湖のあることが、東京までも知れてゐるんですかね。」などといひながら、一人の若者が櫓を押して、船を進めて行つた。辨天の社のある島には、杉だの松だのが、一面に立つてゐて、石の階段が、水際から奥深く次第に高くなつてゐた。その奥には辨天の社があつて、四抱へ以上もある杉の老木が、電光に打たれて立つてゐた。島を繞つて四方に湖面が開けてゐる。周圍四里近いこの湖水は、幾ら高い所に立つても、一望には見果てがつかない。山脚の間々を繞つて入り込んでゐるので、或處は廣く、或處は狭く、周圍にも途がついてゐない。湖を極めるには船に頼るよ

り他に仕方がない。湖上には日の光が縞を織つて、殆ど微動すら見せない。水の面は明るく、暗く、照り渡つてゐる。

島を見てからまた乗つて、誘はれるやうに奥へくと漕いで行つた。

何處の湖水にもロマンスはある。この湖の成立は知らないけれど、若者の語る所では一種の谿湖らしい。山麓の谿間に自然と水が溜まつて、谿間は巨樹の立つてゐたまゝで水に浸され、檜や杉が水中深く白骨のやうになつて、立ち枯れになつてゐるといふことである。その巨木の立ち枯れしてゐる中に銅の船が一艘沈んでゐる。その昔、謙信の智將宇佐美貞行が、謙信の爲に謀つて、謙信の姉婿長尾政景



の謀反を未然に防ぐ爲に、二人して湖上に船を浮かべ、湖上の樅ヶ崎といふ所まで出た時に、水夫に命じて船底に孔を開けさせ、政景の身を擁して、二人とも船と共に沈んでしまつた。船はその船だといふ。それは事實であらう。その後幾度となくその船を引上げようと企てたものもあつた。最近一二年前にもこれを企てて失敗したものがあつた。船のあることは事實だけれど、引上げることは困難である。水が冷いのと、巨木の間にはさまつてゐると、泥の膠著してゐるのとで上げられない。二人の死骸すら遂に上げられずにしまつた。纔に彼等が著けてゐた具足の端を、水中から切り取つて、近くの寺の境内に埋めて墓を建てたとの事

である。又幾百年前から、水中に沈んでゐる巨樹を少しづつ切り上げて、その寺の境内に一字の堂を建てたのもあるとの事である。

湖の東の方には、逃げ行く霧の中から、斑尾山が眞正面に見え出して來た。信越の國境を形づくる山の一つである。振り反つて見ると、妙高・黒姫・飯綱の三山が、これも霧の中から徐かに姿を見せ出した。

私は船を岸の方へかへして、信越の境にまたがるこの三山の雄大な景色をちつと眺めてゐた。上へくと逃げて行く霧は、山の中腹から頂へかけて、次第に空までも廣がつて、山に近い空は薄灰色にばかされて、一帯にどんよりとし



てゐる。

湖水は霧の下に靜かな表面を見せて、迷信の作り出した傳説か、史實の傳へる遺跡か、その遠い昔の祕密を、千古の祕密として、少しも顯さうともしない。

(吉江孤雁)

### 一九 風致史蹟の保護

近時物質的文明の驚くべき發展につれ、風景國たる我が國が、漸次に其の風景を失ひ行くは悲しむべき現象なり。人若し廣重の錦繪に於て見馴れたる東海道五十三驛の舊蹟を探らんとて徒歩旅行をなさんか、恐らくはその過半はこれを見ることを得ざらん。これ畫虛事なる爲に非ずし

て、明治維新後の急激なる世態の變遷が、風景舊蹟を破壊したるが爲なり。碧海の桑田となるは、必ずしも詩人の想像にのみ止らず。

文明と風景とは絶対に兩立し難きものなりとせば、吾人は固より文明を選ばざるべからず。如何に千代田・寶田の光景が詩興を惹けばとて、東京を太田道灌時代の荏土に復せしめんことは、なし得べきことにあらず。されど、必要もなく、已むを得ざる事情もなきに、不注意と没趣味との爲に、史蹟を埋没せしめ、風致を破壊して、天下の風景國をして、天下の殺風景國たらしめんとするは、大いに慨すべきことなり。



今、試みに鎌倉鶴岡八幡宮社前の銀杏樹を伐りたりとせよ。これを材木屋に拂下げて、得べき所果して幾許ぞ。而して吾人は此の老樹あるが爲に、北條時代の鎌倉を懷ふこと一層深きものあり。鶴岡より由井ヶ濱に達する松並木の如きも、これを拂下げて若干の利はあるべけれども、日本の國民の竈の煙にはさしたる影響はなかるべし。何を苦しんで、これを伐つて風致を滅却し、歴史を蹂躪して、詩人、畫家をして啞然たらしむるの要あらんや。

維新の改革は舊來の陋習を一掃したると共に、又保存すべきものをも失はしめたり。所謂玉石俱焚は改革時代に免れ難きことにして、吾人は今更に顧みて、先輩を咎めんと

するにはあらざれども、今日に於てもなほ此の事あるを嘆惜せずんばあらざるなり。所謂江戸百景中の名所が、或は屠殺場となり、或は紙屑屋となり、或は棟割長屋となれるが如き例は言はずもがな、天下の好風景を滅却するを以て無上の快樂となすにはあらずやと思はるゝばかりの所作をなすものあるに至りては、長大息せざらんとすとも得べからざるなり。

凡そ、明治の政治家にして物質的文化の進歩に銳意せしもの、故大久保甲東に若くものなかるべし。彼は殖産興業の事に其の精力を傾注したり。しかも、吾人は泉州高師濱の松林を逍遙して、一基の石碑の下に至る毎に、如何に彼が



襟懷の大なりしかを想見せずんばあらず。當時此の松林を伐りて士族授産の料に供せんとの議起りぬ。事偶、彼の聞く所となるや、

音に聞く高師の濱の濱松も

世のあだ浪はのがれざりけり。

の歌を、堺縣令に寄せしかば、松林は漸く薪となるの厄を免れたり。碑は即ち彼の詠歌を刻して、其の顛末を後世に傳へたるものなり。

三千年の故國、史蹟に富み、且喬木多くして山水の美も亦世界に比なし。全國到る處に散在せる此等の名所舊跡は、單に遠來の旅客の心を慰め、韻人騷士の情を娛しましむる

のみのものにあらず。實に、その一半は國史教育の參考物として、他の一半は優美清高なる心性涵養の資料として、我が國民教育上缺くべからざるものなり。されば、これを保存すると、滅却するとの國運の消長に關係ある、決して小故にあらず。苟もこれを知らば、其の一石を移し、一木を伐るにも、多大の商量を要すべきにあらずや。然るに漫然、漠然、唯一時の物質的利益の爲に亂暴狼藉を逞しうするが如き、是豈忍ぶべき事ならんや。

幸にして我が政府は、古社寺・古畫・古文書等の過去の形見として、歴史・藝術の參考たるべきものは、これを國寶として保存の道を講じ、風致の如きも保安の策を究めしめをれど



も、此の如きは唯政府の施設にのみ俟つことなく、郷人自ら進んで其の保護に努むべきものなり。郷土の風致、史蹟を保存するは、これ即ち郷土を愛し、郷土の歴史を尊重する所以にして、延いては我が全國土の美を保全し、歴史を尊重する所以なり。

(徳富蘇峰の文に據る)

### 二〇 千劍破城

諸國より京に上り集まりし勢  
阿曾彈正少弼の勢  
二階堂出羽入道道蘊の勢

千劍破城の寄手は、前の勢八十萬騎に又赤坂の勢、吉野の勢馳せ加はつて、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、尺寸の地をも餘さず充滿ちたり。旌旗の風に翻つて靡く景色は秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じて

輝ける有様は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく處には山勢是が爲に動き、関の聲の震ふ中には、坤軸須臾に摧けたり。此の勢にも恐れずして、僅かに千人に足らぬ小勢にて、誰を憑み、何をか待つともなき城中に、こらへて防戦ひける楠木が心の程こそ不敵なれ。此の城、東西は谷深く切れて、人の上るべきやうもなし。南北は金剛山に續きて峯峙ちたり。されども高さ二町ばかりにて、周りに里に足らぬ小城なれば、何程の事かあるべきと、寄手是を見侮りて、初一兩日の程は向陣をも取らず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊までかづき連れてぞ上りたりける。城中の者ども少しも騒がず、静まりかへりて、高櫓の



上より大石を投げかけ投げかけ、楯の板を微塵に打碎きて、漂ふ所を差しつめ差しつめ射ける間、四方の坂より轉び落ち、落ち重なつて、手を負ひ死を致す者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門尉、軍奉行にてありければ、手負死人の實檢をしけるに、執筆十二人夜晝三日が間筆も置かず記せり。さてこそ今より後は、大將の御許なくして合戦したらんずる輩をば、却つて罪科に行はるべしと觸れられければ、軍勢暫く軍を止めて、先づ己が陣々をぞ構へける。爰に赤坂の大將金澤右馬助、大佛奥州に對つて宣ひけるは、「先日赤坂を攻め落しつること全く士卒の高名にあらず。城中の構を推し出して、水を止めて候ひしによりて、敵程な

く降參仕り候ひき。是を以て此の城を見候に、是程纔かなる山の嶺に用水あるべしとも覺え候はず。又あげ水なんどをよその山よりかくへき便りも候はぬに、城中に水澤山にありげに見ゆるは、如何さま東の山の麓に流れたる溪水を夜々汲むかと覺えて候。あはれ、宗との人々一兩人に仰せ附けられて、此の水を汲ませぬやうに御計らひ候へかし。」と申されければ、兩大將、此の儀然るべしと覺えて候。とて、名越越前守を大將として、其の勢三千餘騎をさし分けて、水の邊に陣取らせ、城より人のおり下りぬべき道々に、さかも木引いてぞ待ちかけける。楠木は元來勇氣智謀相兼ねたる者なりければ、此の城を拵へける初、用水の便を見るに、五所



の祕水とて峯通る山伏の祕して汲む水此の峯にありて、滴る事一夜に五斛ばかりなり。此の水いかなる旱にも干ることなければ、形の如く人の口中を潤さんこと相違あるまじけれども、合戦の最中には、或は火の災の起ることあり、又喉の乾くことも繁ければ此の水ばかりにては不足なるべしとて、大いなる木を以て水槽二三百打たせて、水を湛へ置きたり。又數百箇所作り並へたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨降れば雷を少しも餘さず槽に受入れ、槽の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞ拵へける。此の水を以て縦令五六十日雨降らずともこらへつべし。其の中に又などかは雨降ることなからんと料簡しける智慮の程こそ淺

からね。されば城よりは、あながちに此の谷水を汲まんともせざりけるを、水防ぎける兵共、夜毎に機をつめて、今や今やと待ちかけけるが、初の程こそあれ、後には次第々々に心怠り、氣緩みて、此の水をば汲まざりけるぞとて、用心の體少し無沙汰にぞなりにける。楠木是を見すまして、究竟の射手を揃へて二三百人、夜に紛れて城よりおろし、まだ東雲の明けはてぬ霞隠れより押寄せ、水邊につめて居たる者共二十餘人斬り伏せて、透間もなく斬つてかゝりける間、名越越前守こらへかねて、元の陣へぞ引かれける。寄手の軍勢是を見て渡り合はせんと轟けども、谷を隔て、峰を隔てたる道なれば、輒く馳合はする兵もなし。天下の武士共之を見て、



あはれ、名越殿の不覺やと、口々に言はぬ者こそなかりけれ。名越一家の人々此の事を聞きて、安からぬ事に思はれければ、當手の軍勢共一人も残らず城の木戸を枕にして討死をせよ。」とぞ下知せられける。是によりて彼の手の兵五千餘人思切つて乗り越え、城のさかも木一重引破つて切岸の下までぞつめたりける。されども岸高うして切り立てたれば、彌猛に思へども登り得ず。唯徒に城を睨み、忿を抑へて息つぎるたり。此の時、城の中より切岸の上に横たへ置きたる大木十ばかり切つて落しかけたりける間、將棊倒しをする如く、寄手四五百人壓に打たれて死にけり。是にちがはんとしどろになつて騒ぐ所を、十方の櫓より、さ

し落し、思ふやうに射ける間、五千餘人の兵共残りすくなに討たれて、其の日の軍は果てにけり。誠に志の程は猛けれども、唯仕出したる事もなくて、若干討たれにければ、あはれ、恥の上の損かな。」と諸人の口ずさみはなほ止まず。尋常ならぬ合戦の體を見て、寄手も侮りにく、や思ひけん、今は初のやうに勇み進んで攻めんとする者もなかりけり。長崎四郎左衛門尉此の有様を見て、此の城を力攻めにすること、人の討たるゝばかりにて、其の功成り難し。唯取巻いて食攻めにせよ。」と下知して、軍を止められければ、徒然に堪へかねて、或は連歌をし、或は棊、雙六を打つて日を過ごし、或は百服茶、褒貶の歌合などを翫んで夜を明かす。是にこそ城



中の兵はなか／＼悩まされたる心ちして、心を遣る方もなかりけれ。

少し程経て後、正成いでさらば又寄手をたばかりて、居眠り覺まさせんとて、藁を以て人長に人形を二三十作つて甲冑を著せ、兵仗を持たせて、夜中に城の麓に立て置き前に疊楯をつき並べ、其の後にすぐりたる兵五百人を交へて、夜のほのぼの明けける霧の下より、同時に鬨をどつとつくる。四方の寄手鬨の聲を聞いて、すはや城の中より打出でたるは、これこそ敵の運の盡くる所の死に狂ひよ。」とて我先にとぞ攻合はせける。城の兵豫て巧みたる事なれば、矢軍ちとするやうにして大勢相近づけて人形ばかりを、木隠れに

殘し置きて、兵は皆次第々々に城の上へ引き上ぐ。寄手人形を實の兵ぞと心得て、是を討たんと相集まる。正成所存の如く敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にはつと落す。一所に集まりたる敵三百餘人、矢場に擊殺され、半死半生の者五百餘人に及べり。軍果てて之を見れば、あはれ大剛の者かなと覺えて一足も引かざりつる兵、皆人にはあらで藁にて作れる人形なり。之を討たんと相集まつて、石に打たれ、矢に中つて死せるも高名ならず、又之を危みて進み得ざりつるも臆病の程あらはれて言ふかひなし。唯ともかくにも萬人の物笑ひとぞなりにける。是より後は彌合戦を止めける間、諸國の軍勢唯徒に城をまもり上げてゐ



魯般は公輸  
雲の梯は雲  
にも届くほ  
どにも梯子  
づ南子に出

たるばかりにて、する業一つもなかりけり。  
さる程に、關東より飛脚到來して、軍を止めて徒に日を送ること然るべからず。」と下知せられければ、宗との大將達評定あつて、身方の向陣と敵の城との間に、高く切立てたる堀に橋を渡して、城へ打入らんとぞ巧まれける。是が爲に京都より番匠を五百餘人召下し、五六八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘りに梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大繩を二三千筋つけて車を以て卷立て、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲の梯も斯くやと覺えて巧なり。やがてはやりをの兵共五六千人梯の上を渡り、我先にと前んだり。あはや、此の城只今打落

されぬと見えたる所に、楠木豫て用意やしたりけん、投松明の先に火をつけて、梯の上に薪を積めるが如くに投げ集めて、水弾きを以て油を瀧の流るゝやうにかけたる間、火梯に燃えついて、溪風炎を吹き布きたり。なまじひに渡りかゝりたる兵共、前へ進まんとすれば、猛火盛んに燃えて身を焦す。歸らんとすれば後陣の大勢前の難儀をも知らず支へたり。側へ飛びおりんとすれば、谷深く岩聳えて肝を冷す。如何にせんと身を揉みて押しあふ程に、梯中より燃え折れて、谷底へどうと落ちければ、數千の兵同時に猛火の中へ落ち重なつて、一人も残らず焼死にけり。其の有様ひとへに八大地獄の罪人の刀山、劍樹に貫かれ、猛火、鐵湯に身を焦す



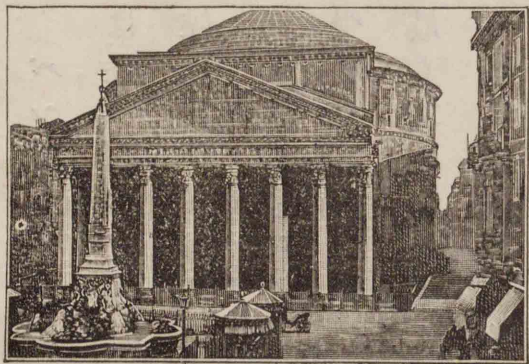
らんも、かくやと思ひ知られたり。

(太平記)

## 二二 羅馬のパンテオン

巴里のパンテオンは、朝夕窓外に望み、足を其の中に踏入れしことも十幾回なるを知らず候へども、本場なる羅馬のパンテオンには本日はじめて詣で申候。

古羅馬の大建築物にて、今に至る迄儼然として二千年前の原形を存せるもの、唯此のパンテオンあるのみに候。構造堅牢にして壯大、英雄の骨を葬るには是でなくてはと存候。一見忽ち頭に浮かぶは、巴里のパンテオンがこれを模して建てられたることに御座候。只異なる點は、羅馬のは



ン オ テ ン バ

後方の建築物が圓形なるにあり。内部の四壁は、巴里の如くきらびやかならざれども、何處となく重みありて人をしめて默想に沈ましむるところは、遙に優り居候。

右方に以太利統一の祖王たるピクトル・エマヌエル王の墓あり、左方に先王ウンベルト王の墓あり、目下裝飾中に候へど門衛の厚意にて拜觀するを得候。パンテオンなる字

義をいへば、もとこれ希臘語にて、パンは多くの義、テオンは神の義にて、諸々の神を一堂の内に祭る主意に候由。小生



は以太利が益、英雄を出して、此の堂内に餘地なからしむるに至らんことを望み候。

パンテオンを出づれば、其の周圍皆木道なり。他の街道は、悉く石道なるに、此處のみ何故に木道にせりやと異し、み候處、同伴者の言に聞けば、これアルゼンチンに行ける當國の移民が寄附したるものにて、改築費永遠の負擔までも引受けたる由に候。移民が故國を忘れざるの記念としては、最も其の意を得たるやり方なりと感服致候。全體以太利の移民は南米に於て最も成功致し居る様子に御座候。國內各町村に宏麗なる新寺院の建築あるは、皆此の移民の寄進によるものにして、これが國民に多大の刺激を與へ候由。

南米の  
和國の  
一  
共

以太利は人口年々増殖致し居候うて、移民の數も亦驚くべきものあり。將來侮るべからざる強敵かと存候。

本日は衆議院議員總選舉の日に當り、市内何となく騒々しく、夕方の新聞賣の聲も常に勝りて勇ましく候。勿論政府黨の勝利なるべく候。勿々頓首。

(赤木格堂)



廣嶋縣立愛中學校

第六學級

高橋可樹

國文新讀本 卷五終

大正十三年十月十三日印刷  
大正十三年十月十六日發行  
大正十二年八月二十日訂正三版發行

國文新讀本  
定價  
卷一 各金四拾三錢  
卷二 各金四拾一錢  
卷三 各金四拾五錢  
卷四 各金三拾四錢  
卷五 各金三拾四錢

大正十四年度臨時  
定價  
卷一 各金七拾七錢  
卷二 各金七拾四錢  
卷三 各金六拾參錢  
卷四 各金六拾參錢  
卷五 各金六拾參錢



編者 藤村 作  
編者 島津 久基  
發行者 佐藤 幹枝  
印刷者 高橋 郁  
東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
東京市京橋區弓町二十五番地

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
振替口座東京二九五〇七番

至文堂

弊堂發行之教科書は供給差支無き様常に澤山製本候來準備致居出問若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文被下度左すれば直に送本可申上候



